

宮城県文化財調査報告書第148集

藤田新田遺跡

仙台東道路建設関係遺跡調査概報



平成4年3月

宮城県教育委員会
日本道路公団

序 文

近年、各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷土にある文化財を再認識し、それを地域づくりの拠点として整備し活用していこうといった考え方を持つところが多くなってきております。

宮城県としても本間知事の提唱により平成2年度から「われらみやぎの東北学おこし事業」を実施するなど、国際化の推進や産業経済の発展の基盤となる歴史と風土に根ざした東北の「地域らしさ」の確立に努め、21世紀に向けた新たな県土づくりに取り組んでいるところであります。

一方、近年の本県における各種開発事業の活発化には目を見張るものがあります。道路建設や團地整備など生活関連事業をはじめ、ゴルフ場などの大規模なレジャー施設や工場団地・住宅団地の進出が著しく、これらの開発によって埋蔵文化財が破壊の危機にさらされる場合が多くなってきています。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を即物的に解明することが出来る貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々にとって最も親しみやすく、精神的なよすがとなるものであります。まさに「東北学」を考える上での最も基本となる資料と言えます。

しかし、埋蔵文化財は土地との関連で保存されてきたものであるため、各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにさらされております。当教育委員会としては開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき平成3年度に当教育委員会が行った発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果が地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のため役立てていただければ幸いです。

最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘作業にあられた皆様へ深く感謝申し上げます。次第です。

平成4年3月

宮城県教育委員会教育長 大立目 謙直

例 言

- 1 本書は日本道路公団仙台建設局が担当する仙台東道路建設計画に伴う藤田新田遺跡の事前調査の概報である。
- 2 調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
- 3 本書における土色についての記述には『新版標準土色帖』（1973年）を利用した。
- 4 本書の第1図は建設省国土地理院発行の1/25,000「仙台東南部」を複製して使用した。
- 5 発掘調査の測量は、道路のセンターライン上の第X系座標 $X = -197885.380$ 、 $Y = 10496.444$ を原点とし、道路センターラインの方向に従って直交座標を組んで行なった。南北基準線は、座標の北に対して $18^{\circ} 09' 21''$ 東へ偏している。
- 6 発掘調査および整理・報告書の作成に際しては、次の方々および機関から助言や御教示を賜った（以下敬称略）。
会田容弘（東北大学文学部助手）、青木和夫（お茶の水女子大学文学部教授）、大橋俊男（東北歴史資料館）、岡田茂弘（国立佐倉歴史博物館教授）、小野山節（京都大学文学部教授）、鈴木拓也（東北大学大学院生）、須藤隆（東北大学文学部教授）、田熊清彦（栃木県教育委員会）、坪井清足（財団法人大阪文化財センター理事）、長谷川厚（神奈川県立埋蔵文化センター）、藤沢敦（東北大学埋蔵文化財調査室助手）、梁本誠（宇都宮市教育委員会）、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館
- 7 本書は調査員全員で協議してそれを以下のような分担で執筆した。
第I・II章は昨年度の本遺跡の概報に一部加筆して転載した。
後藤秀一... 第三章、第四章の2、3-b、第V章
岩見和泰... 第四章の1-a、3-a
金子勇一... 第四章の1-a・b
- 8 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

目 次

I . 調査に至る経過	1
II . 位置と環境	3
III . 調査の方法と経過	5
IV . 調査の概要	11
1 . 古墳時代	11
a . 竪穴住居跡	11
b . 方形周溝墓	23
2 . 平安時代	23
掘立柱建物跡	23
3 . その他の遺構	28
a . 水田跡	28
b . 河川跡	32
V . 調査成果	37

調 査 要 項

遺 跡 名：藤田新田遺跡（宮城県遺跡地名表記載番号 01028 NE）

所 在 地：仙台市若林区荒井字藤田新田

調 査 面 積：約 12000 m²

調 査 期 間：1991年4月8日～11月11日

調 査 主 体：宮城県教育委員会

調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課

調 査 員：白鳥良一・後藤秀一・菊地逸夫・須田良平・岩見和泰・木皿直幸
吾妻俊典・金子勇一・早川英紀

調 査 協 力：日本道路公団、三井建設・福田組共同企業体、仙台市教育委員会

I . 調査に至る経過

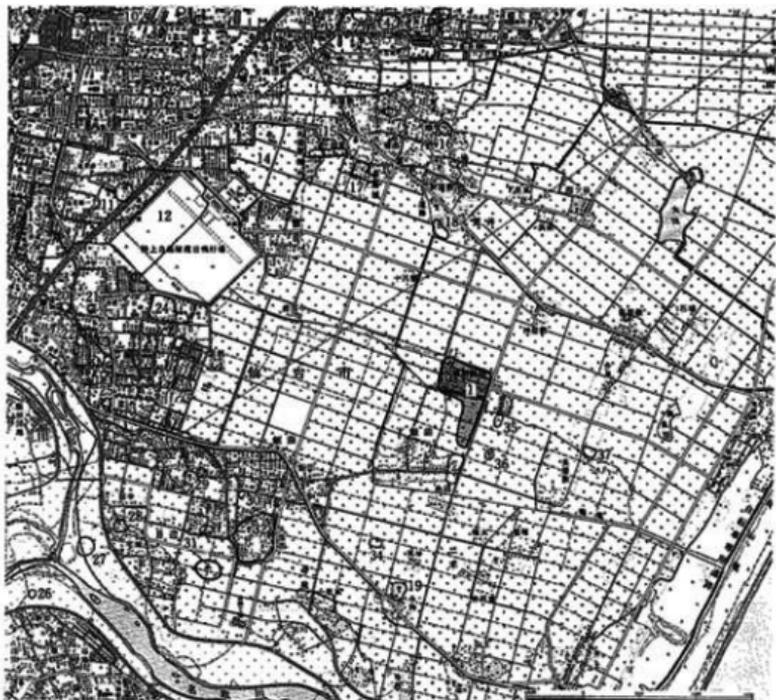
仙台東道路は、亶理町中泉を起点とし、岩沼市・名取市・仙台市・多賀城市・利府町・松島町・鳴瀬町・矢本町・石巻市・河南町・河北町を経て桃生町太田を終点とする仙台湾高規格幹線道路の一部で、亶理町の一般道路6号線から仙台市宮城野区中野の一般道路45号線までの延長約26.3kmの路線である。この道路は、仙台市内の通過交通を分離して現道の機能回復を図るとともに、宮城県・仙台市などが国際化を進めている仙台空港・仙台新港の連絡道路として、仙台都市圏の発展に寄与しようとするものである。このうち、仙台空港ICから仙台東ICまでの約14.1kmの区間は日本道路公団が4車線の一般有料道路事業として施行することとなった。

昭和56年12月に示された計画案によると、その時点での周知の埋蔵文化財包蔵地は避けられていた。しかし、ルートが阿武隈川と名取川の河口にひらけた仙台中積平野を南北に通過するものであることから、自然堤防や浜堤部分には遺跡が存在する可能性があり、改めて詳細な分布調査を実施する必要がある旨を申し入れた。

昭和63年11月に日本道路公団仙台建設局仙台工事事務所長から仙台東道路の建設計画と文化財のかかわりについての正式協議がなされたのを受けて、県教育委員会は仙台市教育委員会、名取市教育委員会、岩沼市教育委員会、亶理町教育委員会と共に平成元年3月に路線敷の詳細な分布調査を行った。その結果、微高地上に位置する仙台市下在家地区、同藤田新田地区、名取市大曲地区、同鶴巻地区、同六角地区、同耕谷地区において遺物の散布が見られたほか、やはり微高地となっている仙台市下飯田地区、名取市雲南山地区、岩沼市浦条地区にも遺跡が存在する可能性があり、さらに低湿地部分でも水田遺構が発見されることが予想されるため、この分布調査結果について早速日本道路公団に回答した。

これらの地区のうち仙台市域分については、用地買収の完了を待って平成元年10月に県教育委員会が下在家地区から下飯田地区にかけて約3kmにわたるほぼ全線の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、下在家地区では遺構・遺物共に発見されなかったが、藤田新田地区と下飯田地区において古墳時代の竪穴住居跡や溝跡・土壇などが多数発見され、両地区とも浜堤上に立地する古墳時代の集落跡であることが判明した。路線敷にかかる面積は、藤田新田遺跡が約24,400㎡、下飯田遺跡が約7,500㎡であった。

両遺跡の確認調査および事前調査については、県教育委員会と仙台市教育委員会が協議しながら協力してあたることにし、県教育委員会が藤田新田遺跡を、仙台市教育委員会が下飯田遺跡をそれぞれ担当することにした。藤田新田遺跡については、県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、平成2年5月と10月に、路線敷内の遺構の有無やその



番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	藤原新田遺跡	河堤	築基跡	弥生、古墳、平安	29	砂押1遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
2	下飯田遺跡	河堤	築基跡	古墳	31	神倉遺跡	自然堤防	包含地	縄文、弥生、古墳、古代
3	隆慶園分尼寺跡	台地	寺院跡	奈良、平安	22	砂押2遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
4	北原敷遺跡	自然堤防	包含地	平安、中世	23	中興西遺跡	自然堤防	包含地	弥生、古墳、古代
5	明徳敷遺跡	自然堤防	包含地	平安	24	神野城跡	自然堤防	城跡	中世
6	曾利松明神古墳	沖積地	古墳		25	河原越遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
7	押白遺跡	沖積地	包含地	古代	26	大塚山古墳	河川敷	河	古墳
8	谷地原跡	自然堤防	城跡	中世	27	日笠遺跡	自然堤防	包含地	古墳(仰)
9	法蓮塚古墳	自然堤防	河	古墳	28	日笠跡跡	自然堤防	城跡	室町
10	志慮遺跡	沖積地	築基跡	古代	29	上原敷遺跡	自然堤防	包含地	古墳、古代
11	湯見塚古墳	自然堤防	湖方後門跡	古墳	30	小栗塚古墳	自然堤防	河	古墳
12	南小泉遺跡	自然堤防	築基跡	弥生、古墳、奈良、平安	31	高田遺跡	自然堤防	包含地	弥生、古代
13	石林遺跡	自然堤防	城跡	古墳、平安、中世、近世	32	今泉城跡	自然堤防	城跡	中世
14	稲刈家部集落跡	沖積地	築基跡	奈良	33	隆慶園分寺跡	台地	寺院跡	奈良、平安
15	中倉家遺跡	自然堤防	包含地	平安	34	藤道遺跡	沖積地	包含地	古代
16	瓦井跡跡	自然堤防	城跡	中世	35	屋敷末遺跡	河堤	包含地	古墳、古代
17	島音城跡	自然堤防	城跡	中世	36	下飯田集落堂古墳	河堤	河	古墳(仰)
18	下瓦井遺跡	自然堤防	包含地	平安	37	岡崎園遺跡	河堤	包含地	中世、近世
19	二本筋跡	自然堤防	城跡	安土桃山	38	中倉南遺跡	河川敷	包含地	弥生、古墳

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

広がりにより明確に把握することを目的とした確認調査を実施した。

調査では、路線幅である東西約50m、南北約480mの約24,000㎡を対象に、道路方向に合わせた東西幅6m、長さ50～60mの南北トレンチを東西6mの間隔で24箇所を設定した。その結果、試掘調査で検出され古墳時代と考えられた竪穴住居跡の他に、掘立柱建物跡、円形周溝、土器集中遺構さらに河川跡、水田跡および多数の土壌、溝を検出した。この中で、竪穴住居跡、円形周溝、土器集中遺構をそれぞれ調査した結果、竪穴住居跡と土器集中遺構が古墳時代中期の南小泉式期のもの、円形周溝が古墳時代～古代にかけてのものと考えられた。また掘立柱建物跡は平面確認だけであるが古代のものとみられることから、本遺跡は試掘調査で考えられたような古墳時代だけの集落跡ではなく、古墳時代～古代にわたって営まれた重複する集落跡であることが明らかになった。そして集落跡の広がり、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、円形周溝などの主な遺構の分布状況から、東西は路線幅いっぴいの50m以上、南北は約250mと捉えられた。

この他、少量ではあるが弥生土器も出土していることから当該時期の遺構の存在も想定された。さらに対象地区の北側や西側では水田跡も検出しており、年代は中世以降のものと考えられた。以上のような調査成果を踏まえて県教育委員会は、日本道路公団の委託を受けて平成3年4月8日から同年11月11日まで事前調査を実施した。調査面積は、約12,000㎡である。

II．位置と環境

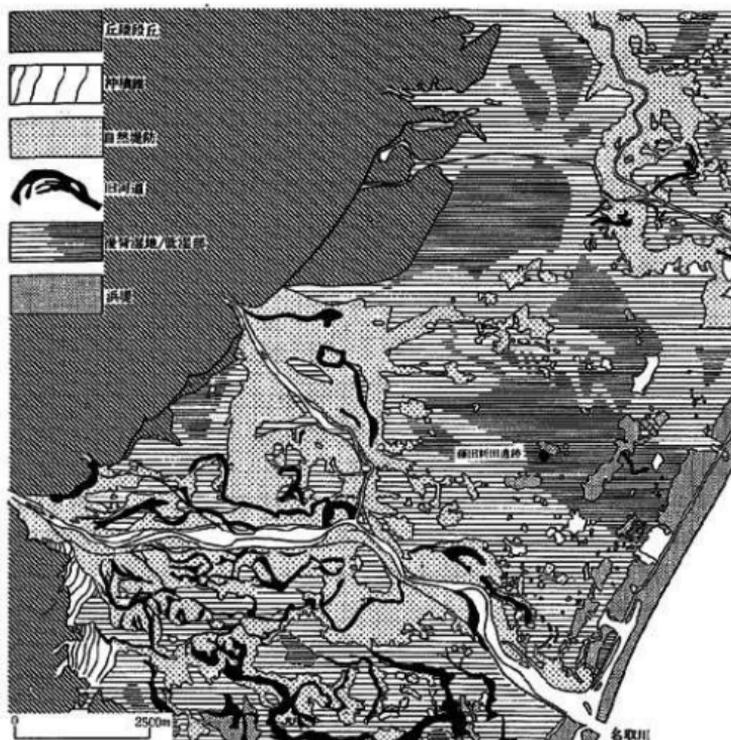
藤田新田遺跡は仙台市若林区荒井字藤田新田にあり、JR東北線長町駅の東方約10.5kmの地点に位置している。この地域は南北に仙台平野が広がり、東方は約3kmで仙台湾に面した海岸に達し、西方は仙台市街地の背景に遠く蔵王連峰を望むことができる。標高は1m前後と低く、付近一帯は小規模な集落が散見する以外おおむね水田地帯となっている。

仙台平野は地形的にみると市の東部付近において浜堤や自然堤防などの微高地が随所に発達している。松本秀明氏によれば、この地域は海岸線とほぼ平行して南北に延びる4本の浜堤列が認められ、形成年代は最も古い内側の列で約5000～4500年前頃であるという（松本：1984a）。それによれば、本遺跡は下在家-藤田新田-下飯田と連なる内側の列に該当することが明らかであるが（第2図）、現状では耕地整理のため平坦化されており、旧地形を知ることができない。本来は浜堤と後背湿地からなる地形に小さな河川が入り組むなど、変化に豊かな地形環境にあったようである。なお本遺跡の時代である弥生～古墳時代の頃は、海岸線がかなり近く、遺跡の東方約1kmすなわち現在よりも2kmほど内側にあった

と考えられている（松本：1984b）。

この浜堤上にある周辺の遺跡についてみると、現在のところ本遺跡のほか下飯田遺跡や屋敷末遺跡、下飯田薬師堂古墳など古墳時代の遺跡のほか築道遺跡や二木館跡などいくつかの古代～中世の遺跡がある。これらはいずれも弥生～古墳時代以降に属し、縄文時代以前のものは確認されていない。このことは前述したような立地基盤の形成年代が比較的新しいとされることに起因するものと思われ、この地域の歴史的背景を考える上で興味深い現象といえる。

ところで、この地域の遺跡の数は仙台市内の他の地域と比較して必ずしも多くないが、最近土木工事計画に関連して新たに発見されたり、範囲が大幅に広がったりするものなどがあり、漸次増加拡大の傾向にあることが指摘される。このことは、浜堤が南北に長く連



第2図 周辺の地形分類図

なる地形的状況との関係からみても予想されることであり、低湿地ということで、これまで遺跡の把握に十分とはいえなかった本遺跡周辺については、今後詳細な分布調査や確認調査によって、低湿地における遺跡の分布やあり方などを明らかにしてゆく必要があると考えられる。

Ⅲ．調査の方法と経過

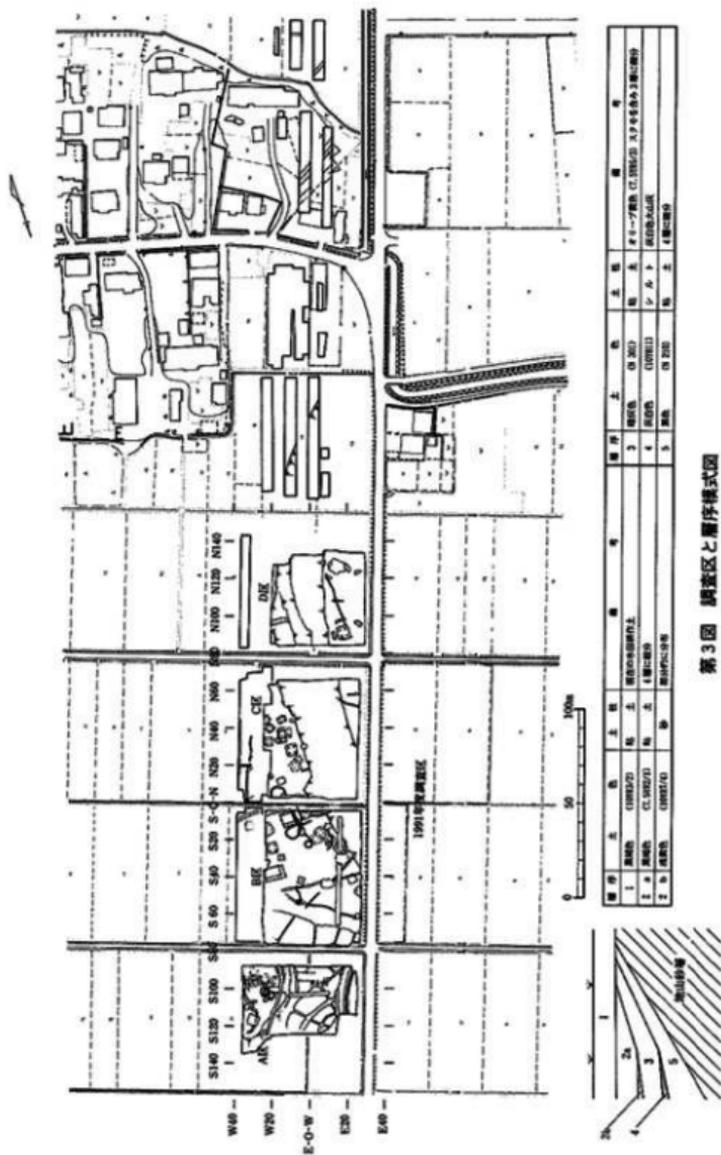
今回の調査は、一昨年度の試掘調査、昨年度の確認調査の成果を踏まえて実施した仙台東道路の建設に係る事前調査である。調査対象地は東西がほぼ道路幅いっぱいの約50m、南北約250mの約12,000㎡である。調査区は東西方向の道路や水田の用水路との関係から4地区に分けて設定し、南からA区、B区、C区、D区とした(第3図)。ところで、これまでの調査では遺構の掘り下げ時に湧水がみられたことから、これを防ぐための調査区の周囲に排水溝を設けることにした。調査は、排水溝の設置で西端部付近の竪穴住居跡が壊されるC区、次いで工用道路の付け替えが行われるA区の西半部、そしてB区、最後にD区とA区の東半部といった順で進めることにし、4月8日から開始した。

調査の結果、A区では竪穴住居跡8軒、方形周溝墓2基、掘立柱建物跡1棟、円形周溝3基、B区では竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡5棟、円形周溝2基、C区では竪穴住居跡10件、掘立柱建物跡1棟、円形周溝1基、D区で竪穴住居跡1軒を検出している他、B区からD区にかけて続くS D 302河川跡、A区南端部の東西方向のS D 115河川跡、A区東半部とB区南端部で水田跡や各地区で多数の溝・土壌なども検出した。これらの遺構は、水田跡以外をすべて浅黄褐色砂あるいは黄褐色粘土の地山面で検出しており、D区のS I 401を除き、東S D 302、北をS D 302とD区で合流する東西方向の河川跡、南をS D 115によって囲まれた場所に分布していることが判明した。

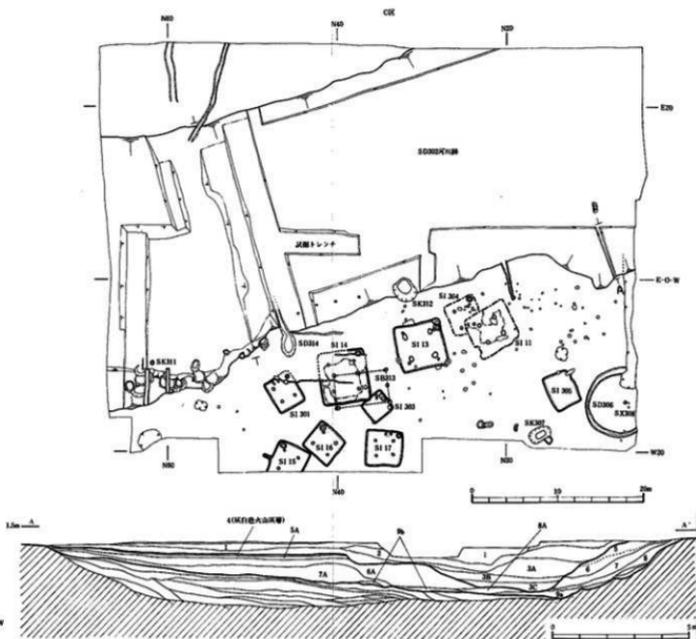
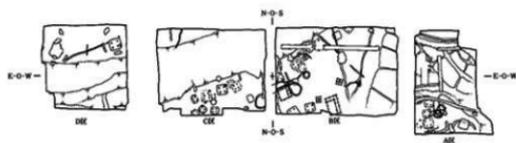
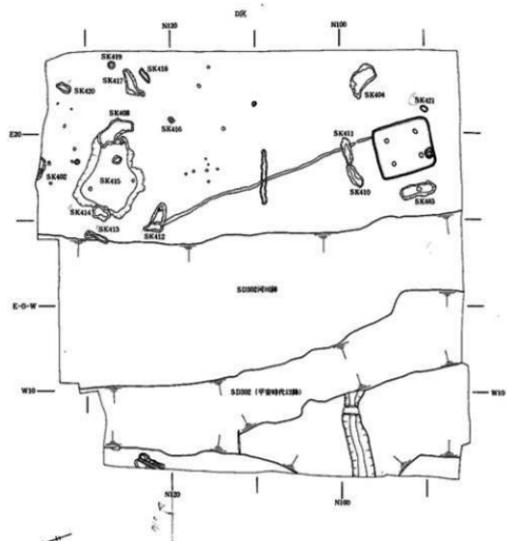
ところで、出土遺物や年代が10世紀前半頃と考えられる灰白色火山灰の存在から時期を特定できた主な遺構をみると、古墳時代前期から中期にかけての竪穴住居跡などと平安時代の建物跡・水田跡の2時期の遺構群に分けて捉えられた。したがって、本遺跡は古墳時代と平安時代の重複する2時期の集落跡とみられ、両時期の集落とも同じ場所を選んで立地していると考えられた。

この他A区で検出したS D 121溝は、古墳時代前期の塩釜式期とみられるS D 105・106方形周溝墓より古く、また弥生土器もS D 302などより出土していることからみると、弥生時代の遺構である可能性も考えられた。

調査した遺構については、写真撮影・平面図の作成の後に断割り調査を実施し、細部の写真撮影・断面図の作成・平面図の補足を行なった。平面図の作成は、B区とC区の間



第3図 調査区と層序模式図



第5図 C・D区全体図

ある道路センターの第X系座標；X = - 19785.380、Y = 10496.444を原点とし、道路センターの方向に合わせた直交座標を組んで実施した。最後に土層の注記と図面のチェックを行ない、一切の作業を11月11日に終了した。その間、一応の成果のまとまった8月1日に記者発表を行ない、8月3日に一般の人々を対象とした現地説明会を開催した。

IV 調査の概要

調査の結果、A区では竪穴住居跡8軒・掘立柱建物跡1棟・方形周溝墓2基・水田跡3面・円形周溝3基・土壇・溝跡・ピット・河川跡、B区では竪穴住居跡12軒・掘立柱建物跡5棟・水田2面・円形周溝2基・土壇・溝跡・ピット・河川跡、C区では竪穴住居跡10軒・掘立柱建物跡1棟・円形周溝1基・土壇・ピット・河川跡、D区では竪穴住居跡1軒・土壇・溝跡・河川跡が発見された。遺物としては、古墳時代と平安時代の土器が多量に出土した他、河川跡からは石製模造品や古墳時代から平安時代にかけての木製品や動物の骨・植物の種子が発見されている。遺構は出土遺物から古墳時代と平安時代ものに大別され、古墳時代のものとしては竪穴住居跡・方形周溝墓、平安時代のものとしては掘立柱建物跡、その他いくつかの時期にわたって存在した水田跡と河川跡がある。以下ではこれらの中で整理作業の終了したものについて古墳時代の竪穴住居跡から記述して行くことにする。

1. 古墳時代

a. 竪穴住居跡

S I 101 住居跡（第6図）

[検出位置] 調査A区北西隅に位置する。A区北西側に広がる微高地状の平坦な地山面で検出された。堆積土及び床面の大半は1989年の試掘の際に失われているが、西隅と東隅で僅かに残っていた。

[平面形・規模] 掘り方埋土の残存状況から見ると、各辺が5.5mほどの方形を呈する。住居の方向は西辺がほぼ真北を向いている。

[重複] 北辺部でS I 102住居跡と、南辺部でS I 104住居跡と重複しているが、いずれも残存状況が悪く、新旧関係は不明である。また、住居の中央を東西に横切るようS I 105方形周溝墓と重複しており、これよりも新しい。

[堆積土] 床面が残っていた部分では、黒褐色砂質土が床面を直接覆っている。

[壁] 壁の残存高は数cmで、残りの良い西隅の壁で9cmであった。地山を壁とし、その立ち上がりは比較的急角度である。

[床面] ほぼ平坦で、掘り方埋土を床面としている。

[柱穴・ピット] 住居の対角線上に位置する四隅寄りの地山面で、柱穴を確認した。このうちP1からは、側面の一ヶ所にほそが切られている径18cmの柱根が発見された。他の3つの柱穴にはいずれも柱の抜き取り穴が認められた。柱穴の大きさは径30～52cm、深さは38～49cmである。なお、北東側のP1はほぼ同位置にあるP5と切り合いが認められ、柱根が残っていたP1が新しい。P5は他に関係するピットが見つかっていないことから、北東側の柱穴のみ建て替えがあったものと思われる。

[掘り方底面の痕跡] 掘り方埋土は住居の壁際に沿って70～140cmほどの幅で認められたが、この底面から、大きさが10～20cmほどの、平面形が半円形ないしは頂部に丸みを持つ三角形を呈する痕跡が多数検出された。任意に選び出した痕跡10個についてみると、縦の断面は短辺が直線的で、長辺は僅かに弧を描いており、断面形は三角形に近い形をしている。横の断面形は底面が「U」字状を呈し、深さは3～10cmであった(第6図)。平面形や大きさ、深さはまちまちであるが、基本的な痕跡の形状と断面形には規則性が認められ、連続性が指摘できることから、これらは住居を作るための素掘りを行った際に生じた道具の痕跡と推定される。平面形と断面形に曲線や曲面が共通して認められることから道具の先端の形状は曲線を描いているものと考えられ、使用の際にこうした特徴を生じる道具としては、U字状の刃先を持つ鋤が考えられる。痕跡は形状の類似性から一定の方向性と連続性を指摘でき、東辺で1つ、西辺で3つ、南辺で1つ、北辺で2つの計7つの群に分けることが可能である。これらは竪穴住居を作る上での基本的な作業となる素掘りの仕方を反映しているものと考えられ、素掘りのあり方を復元し得る貴重な資料と言えよう。

[出土遺物] 掘り埋土から土師器片が出土している。いずれも小破片であるが、その特徴から古墳時代のものである可能性が高い。

S I 201住居跡(第7～10図)

[検出位置] 調査B区北側に位置している。確認面は地山である。

[平面形・規模] ほぼ正方形を呈し、規模は各辺約3.5mである。方向は西辺で真北から約11°東に偏している。

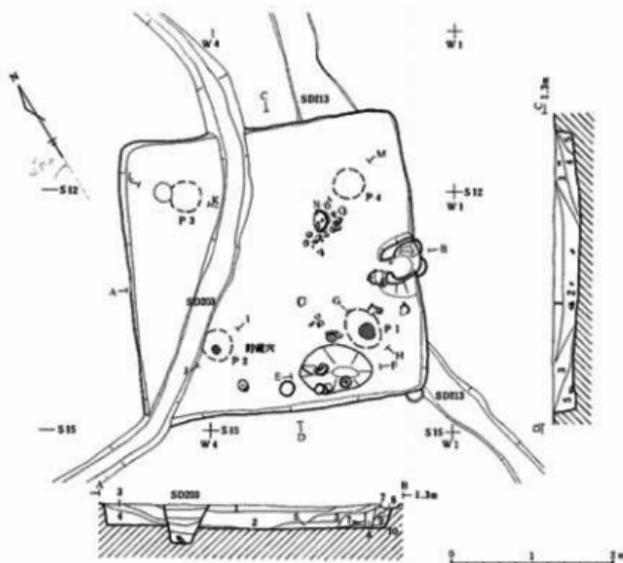
[重複] S D203円形周溝・S D213溝跡と重複し、S D213より新しく、S D203よりも古い。

[堆積土] 堆積土は10層に分けられ、第1～4層はいずれも自然堆積土である。第5層は炭化物質、第6層はカマド崩落土で、第7～10層はカマド内堆積土である。

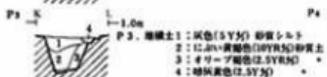
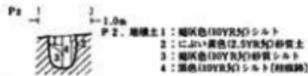
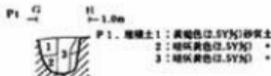
[壁] 地山を壁としている。残存高は20～28mで、立ち上がりは急角度である。

[床面] 掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

[柱穴] 柱穴は住居の対角線上に位置する4箇所で柱穴が検出され径33～52cmほどの



層 号	土 色	土 性	備 考
1	黄褐色 (L.S05/S1)	シロト	砂質が強く、炭化物を多数含む。しりりあり。
2	褐色 (L.S05/S1)	シロト	炭化物の多い灰をアロップ状に含む。炭化物を多数含む。しりりあり。
3	灰褐色 (L.S05/S2)	シロト	炭化物の多い灰をアロップ状に含む。炭化物を多数含む。しりりあり。
4	黄褐色 (L.S05/S2)	砂質シロト	地山の土をアロップ状に若干含む。しりりあり。
5	褐色 (C91.S/S2)	粘土質シロト	炭化物を若干含む。しりりあり。
6	黄褐色 (L.S05/S1)	シロト	骨や竹炭を含む。しりりあり。
7	L.S05/黄褐色 (L.S05/S2)	粘土質シロト	骨や竹炭の粘土をアロップ状に多く含む。
8	灰褐色 (L.S05/S2)	シロト	骨や竹炭を含む。炭土を少量含む。しりりあり。
9	黄褐色 (L.S05/S2)	シロト	骨や竹炭を含む。しりりあり。
10	灰褐色 (L.S05/S2)	砂質シロト	骨や竹炭を含む。しりりあり。



層 号	土 色	土 性	備 考
1	褐色 (L.SY/S2)	砂質シロト	L.S05/黄褐色砂質シロトを多く含む。しりりあり。
2	灰褐色 (L.SY/S2)	砂質土	L.S05/黄褐色砂質シロトを若干含む。地山の土をアロップ状に少量含む。しりりあり。
3	褐色 (L.SY/S2)	砂質シロト	中々しりりあり。
4	暗灰黄色 (L.SY/S2)	砂質土	中々しりりあり。
5	黄褐色 (L.SY/S2)	砂質土	中々しりりあり。

第7図 S1201号住居跡

円形および楕円形で、深さは40～46cmである。柱痕跡が明確に確認できたのはP1・P2で、径はP1が20cm、P2が10cmである。

[カマド]東辺中央で検出された。煙道部は検出されず、奥壁を掘り凹めて煙道として使用された可能性がある。本体の上部は崩壊しており、下部のみが残っていた。燃烧部の大きさは幅29cm・奥行41cmで、粘土によって構築されたものである。中央部底面に焼け面が認められた。カマド奥壁上部2箇所小さな半円形のビットは攪乱である。

[貯蔵穴]南辺中央東寄りの床面で検出した。平面形は楕円形で、規模は東西89cm・南北60cm、深さ23cmである。堆積土は5層で、遺物は1・2層から出土している。

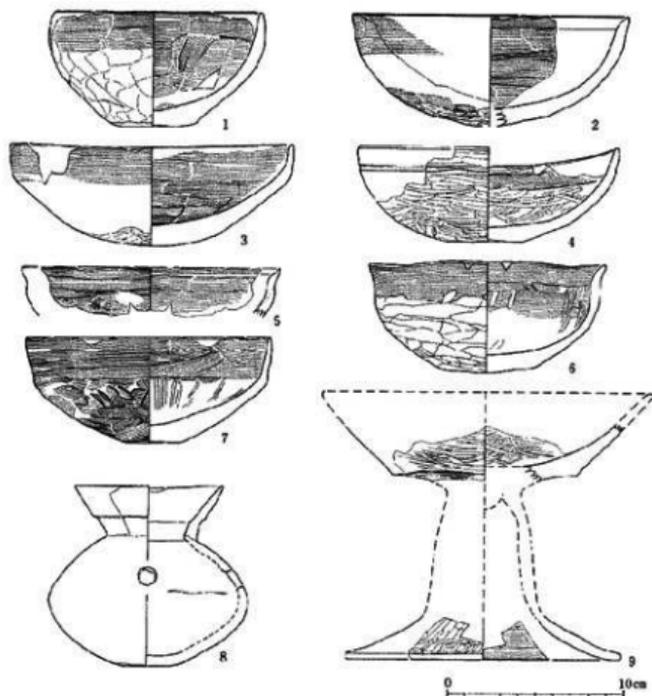
[出土遺物]床面、カマド、貯蔵穴、堆積土などから、土師器の坏・高坏・壺・甕・甑が出土しており、須恵器の甕を模倣したものもある。

坏（第8図1-7）：図示できた7点のうち、1・4・7が平底、2・3が丸底で、6が丸底風の平底を呈し、5は底部欠損のため不明である。1は体部が丸みを持って外傾し、口縁部で直立するもので、体部外面はナデと思われるが、明瞭な調整痕は見えず、単位のみが観察される。2は1と同様に体部が丸みを持って外傾し、口縁部において短く外反して内面に稜を形成する。体部外面上半は不明であるが、下半部にはケズリに近いナデが見られた。3は体部が直線的に外傾した後、上位で屈曲し、口縁部は短く直立するもので、体部外面は平滑で調整痕は見えないが、体部内面にはヘラナデを施している。4は体部と口縁部を稜線と段によって画され、口縁部で直線的に立ち上がる。調整は外面がミガキを主体として底部にのみケズリを施しており、内面は口縁部がヨコナデ、体部がミガキとなっている。5は体部上半がゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部でくびれて外傾し、内面に稜がみられる。6は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部で短く外反し、内面にのみ稜線が認められる。体部外面に単位の大い粗いミガキが見られ、内面は調整痕が不明瞭だが、ミガキが施されていたものと思われる。7は、体部と口縁部を稜線と軽い段によって画され、口縁部が長く直線的に立ち上がるもので、調整は口縁部が内・外面がヨコナデとナデ、体部外面はやや粗いヘラナデ、内面はナデの後に放射線のミガキを施している。

壺（第9図1-3）：1は口縁部が内湾気味に外傾し、体部がつぶれた球形で丸底のものである。器面調整は、口縁部がヨコナデ、体部外面上半がハケメの後ナデ、下半がケズリとミガキで、内面には指ナデが施されている。2は口縁部が欠損しているが、体部は球形で底部は平底である。体部には丁寧なナデに部分的にミガキが見られ、底部付近はケズリの後ナデを施していると思われる。内面には丁寧なナデが見られた。3は、1・2に比べてやや大型で、口頸部は口縁部を欠損しているため不明だが、外傾するものと思われ、体部はつぶれた球形を呈するものである。口縁部にヨコナデ、体部外面上半がヨコナデ、

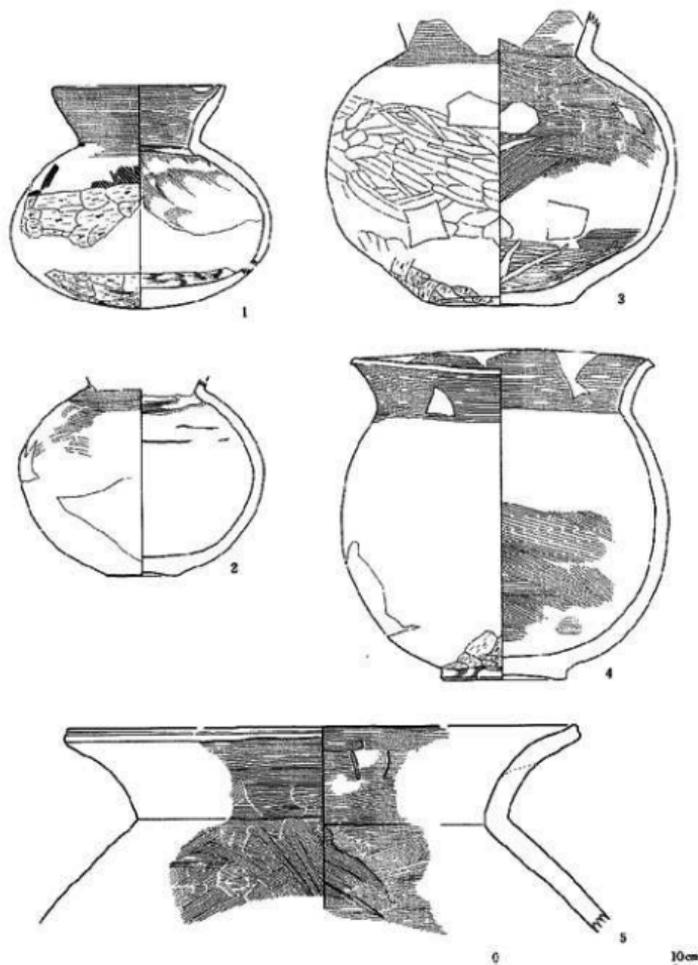
中央がケズリの後ミガキ、下半がケズリの後ミガキが丁寧なナデが見られ、内面は体部上半がナデ、下半がナデとミガキである。

甕(第8図8)：住居内南側中央西寄り出土した。口頸部が外傾し、外面の中位に段が付き、内面には稜線が巡る。体部は算盤玉状を呈し、底部は小さな平底である。最大径は体部中央にあり、口頸部は短く、器高の3分の1以下である。体部中央のやや上部に径1cmほどの円孔がある。器面調整であるが、外面は器面が平滑で、明瞭な調整痕は認められ



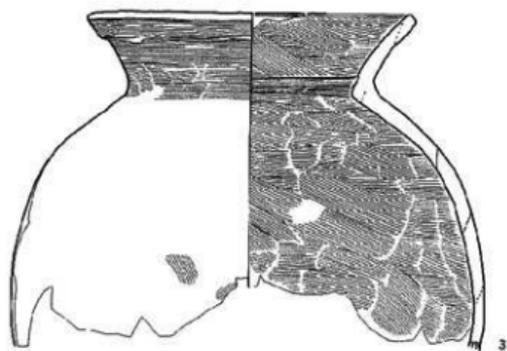
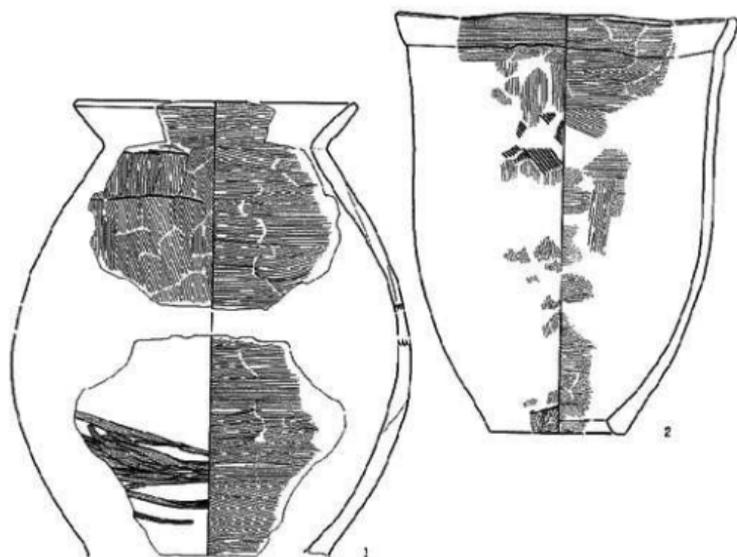
No.	器名	形状	口径(㎝)	口深(㎝)	体径(㎝)	器高(㎝)	外 面	内 面	底 部	底 径(㎝)	備 考	写真掲載No.
1	土器鉢	浅 鉢	11.7	0.9	6.5	0.9	口縁部：ケツリ、ナデ、稜線、ナデ	口縁部～体部：ナデ	平底	2.7		11-1
2	土器鉢	浅 鉢	15.1	—	6.3	0.9	口縁部：ケツリ、ナデ、稜線、ナデ	口縁部～体部：ナデ	平底	—		
3	土器鉢	浅 鉢	10.5	0.9	5.8	0.9	口縁部：ケツリ、ナデ、稜線、調整痕	ケツリ、ヘラツケ	平底	2.7		11-2
4	土器鉢	浅 鉢	14.1	1.2	5.4	0.9	口縁部：ケツリ、ナデ、稜線、調整痕	ケツリ、ナデ	平底	2.7		11-3
5	土器鉢	浅 鉢	14.0	—	2.8	0.9	口縁部：ケツリ、ナデ、ナデ	ケツリ、ナデ	平底	1.7		
6	土器鉢	浅 鉢	13.0	—	6.4	0.9	口縁部：ケツリ、ナデ、稜線、調整痕	ケツリ、ナデ、調整痕	平底	1.4		11-4
7	土器鉢	浅 鉢	13.0	0.9	6.5	0.9	口縁部：調整痕、稜線、ナデ	ケツリ、ナデ、ナデ、調整痕	平底	2.7		11-5
8	土器甕	頸 甕	1.8	1.0	10.5	—	口縁部：ケツリ、ナデ、稜線、調整痕	調整痕	平底	2.4	調整痕あり	11-6
9	土器甕	浅 甕	—	—	13.0	—	口縁部：ケツリ、ナデ、稜線、調整痕	ケツリ、ナデ、調整痕	平底	1.7		

第8図 S1201出土遺物(1)



№	器 別	器 形	口径(cm)	底径(cm)	高径(cm)	内 面	外 面	施 装	積 層 数	重 量	付属品別名
1	土師器	壺	3.8	—	12.6	シヨクシヨク、黒コナダ、黒線、ナダ・ハナメ・ナダ	黒コナダ、黒ナダ	丸蓋	1/1	—	135
2	土師器	壺	—	2.8	1	黒線・ナダ・ナダ、黒線付シヨクシヨク・ナダ	シヨク、ナダ	平蓋	1/1	黒線付	—
3	土師器	壺	—	6.4	1	黒線、黒コナダ、黒線、シヨク・ナダ・1段	黒コナダ、ナダ、1段	平蓋	1/1	—	—
4	土師器	壺	5.9	—	18.5	シヨクシヨク、黒コナダ、黒線、ナダ・ナダ	黒コナダ、ナダ	平蓋	1/1	黒線	137
5	土師器	壺	13.7	—	11.7	シヨクシヨク、黒コナダ・ナダ、黒線、1段・ナダ	ハナダ、黒コナダ、ナダ	—	—	1/1	—

第9図 S120出土遺物(2)



0 10cm

図	番号	器名	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外 径	内 径	底 径	口 径	備 考	写真枚数
1	土師器	甕	38.0	—	21.5	口縁部：斜線文、胴部：ハツノリ文	口縁部：斜線文、胴部：ハツノリ文	—	1/4	片断出土	
2	土師器	甕	33.0	(口径)	21.7	口縁部：斜線文、胴部：ハツノリ文	口縁部：斜線文、胴部：ハツノリ文	胴部：斜線文	胴部	1/5	片断出土
3	土師器	甕	38.0	—	21.0	口縁部：斜線文、胴部：斜線文	口縁部：斜線文、胴部：斜線文	—	1/8	片断出土	

第10図 S I 201出土遺物(3)

ず、体部下半から底部にかけては磨滅により調整は不明である。内面は口頸部が外面と同じで、体部にはナデが施されている。内面の一部に輪積み痕が認められた。須恵器の甗を模倣した土器である。

高坏（第8図9）：住居内北側やや東寄り出土した。同一個体の坏部下半と脚部下半の小破片で、復元実測を行って図示したものである。坏部は屈曲して外傾するもので、やや鈍い稜線を持つ。脚部は下端がゆるやかに開く円筒状を呈する。器面調整は、坏部の外面がナデ後ミガキ、底面がケズリないしは粗いナデの後にミガキが施されており、内面はミガキである。脚部は外面がミガキ、内面上半がケズリ、下半はヨコナデが施されている。

甗（第9図4・5、第10図1・3）：第9図の4は体部中央が膨らみ、頸部でくびれ、口縁部が外傾し、端部は面取りされている。器面調整は口縁部がヨコナデ、体部外面は明瞭な調整痕は見えないが器面は平滑で、体部下半は熱をうけており、剥落・磨滅が著しい。底部付近にケズリないしは粗いナデが見られた。5は大型の甗で、体部上半から頸部にかけて直線的に内傾し、口頸部は大きく外反する。口縁端部に凹線が見られる。第10図の1は長胴の甗で、体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、最大径は張り出す胴部にある。口頸部は直線的に外傾し、端部は面取りされる。体部外面上半に縦方向のヘラナデ、中央部にナデ、下半は不明瞭ではあるが、部分的に横方向のミガキ状のナデが認められた。3は体部が球形を呈し、口頸部はゆるやかに外反し、中位に段が付きにぶい稜線が巡る。外面の調整は不明瞭であるが器面は平滑で、内面にはやや粗いナデが施されている。

甗（第10図2）：無底の甗である。底部からやや膨らみながら外傾して立ち上がり、口頸部が軽く屈曲して僅かに外反して立ち上がる。器面調整は口頸部がヨコナデ、体部はハケメ後にナデで、部分的にハケメが残る。内面は全体にナデが施されており、体部と口頸部の境に稜線が認められる。

S I 301住居跡（第11・12図）

[位置・立地] 調査C区北西側に位置する。C区を南北に流れるS D 302河川跡の西側に広がる微高地状の平坦な地山面で検出された。開田の際に削平を受けており、また、東隅は1989年の試掘の際に失われている。

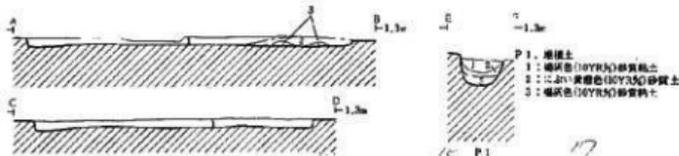
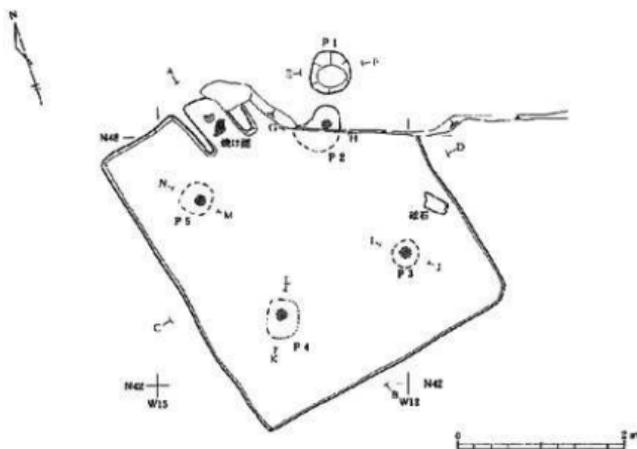
[平面形・規模] 北辺が約3.9m、西辺が約3.5m長方形を呈する。

[堆積土] カマド部分を除いて、床面の大部分は黒褐色砂質上層に直接覆われていた。

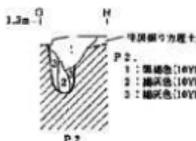
[壁] 壁の残存高は10cmほどで、地山を壁とし、その立ち上がりは比較的急角度である。

[床面] 掘り方埋土を床面としており、ほぼ平坦である。

[柱穴] 床面を精査した際には確認できなかったが、掘り方埋土を掘り下げた段階で住居の対角線上に位置する四隅寄りで柱穴を検出した。いずれも柱は抜き取られており、抜き取り



層号	土色	土質	特徴
1	黄褐色 (10Y5/3)	砂質シルト	地層面がやや起伏し、土層あり。
2	暗褐色 (10YR5/3)	粘土質シルト	地層面がやや起伏し、土層あり。土層あり。土層あり。土層あり。
3	暗褐色 (10YR5/3)	粘土質シルト	土層あり。土層あり。土層あり。土層あり。
4	1: 黄褐色 (10Y5/3)	粘土質シルト	土層あり。土層あり。土層あり。土層あり。



34
1/5
49

穴の下から径12～18cmほどの柱痕跡が確認された。掘り方は径27～31cmの円形で、深さは床面から48～68cmであった。

[カマド] 東辺の中央北寄りで検出した。燃焼部のみが残存しており、燃焼部は幅40cm・奥行68cmで、側壁は粘土によって構築されている。中央部の底面には焼け面が認められ、周りからは高坏の脚部などが出土した。なお、カマド崩壊土の下、カマド底面直上の炭化物層から炭化米が出土している。

[貯蔵穴] 住居の東隅から長径52cm・短径50cm、現状での深さが38cmほどの不整形円形を呈するピットを検出した。堆積土は3層からなり、いずれも自然堆積土である。

[出土遺物] カマド内、床面、堆積土から土師器・高坏・壺が出土している。

坏(第12図1)：カマド内から1点出土している。小さな平底の坏で、体部が丸みもちながら外傾し口縁部に至るもので、口縁部ではやや内傾する。器面調整については、下部は不明瞭であるが、外面の口縁部をヨコナデした後に体部へ横方向のヘラミガキを行っている。内面も同様に口縁部をヨコナデ後、縦方向にヘラミガキを行っている。

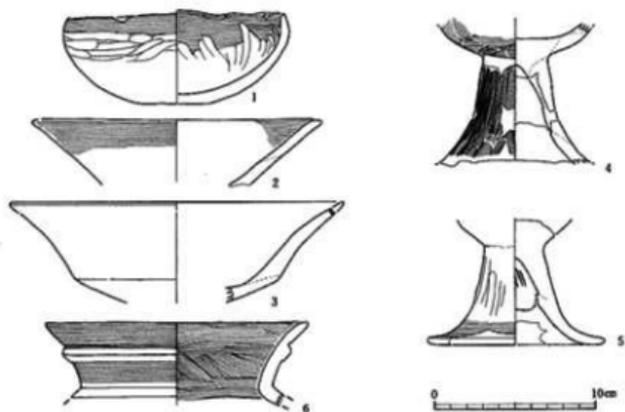
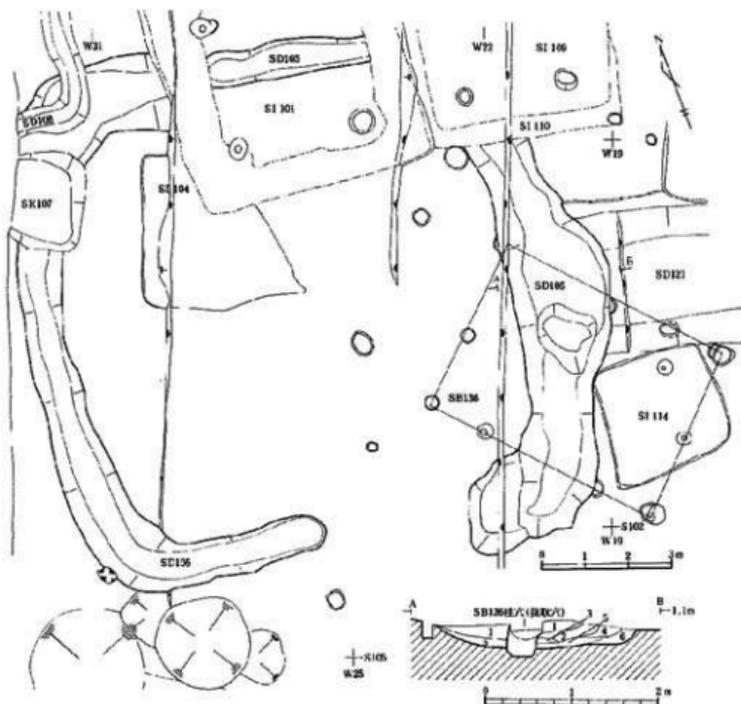


図	番号	形状	径	高さ	厚さ	出	所	内	容	積	積	層	出	土
1	土師器 坏	丸形	12.2	4.2	0.3	1	カマド内、1点	ヨコナデ、ヘラ	容量	1.7	燃焼部	第3	109	109
2	土師器 坏	片断	12.0	-	0.4	1	カマド内、ヨコナデ、側壁、ヨコナデした部分	ヨコナデ、ヨコナデ、側壁、ヨコナデ	-	1.7	燃焼部	第3	109	109
3	土師器 坏	丸形	12.0	-	0.4	1	カマド内、ヨコナデ	ヨコナデ、ヨコナデ	-	1.7	燃焼部	第3	109	109
4	土師器 坏	丸形	-	1.5	0.4	1	カマド内、ヨコナデ、ヨコナデした部分	ヨコナデ	-	1.7	燃焼部	第3	109	109
5	土師器 坏	丸形	-	1.5	0.4	1	カマド内、ヨコナデ、ヨコナデした部分	ヨコナデ	-	1.7	燃焼部	第3	109	109
6	土師器 坏	片断	1.5	-	0.3	1	カマド内、ヨコナデ	ヨコナデ	-	1.7	燃焼部	第3	109	109

第12図 S1301出土遺物

高坏（第12図2-5）：図示できたのは、坏部のみのものが2点、脚部のみのものが2点である。これらのうち、カマドから3点、床面から1点出土している。2は直線的に外反するものである。3はやや外湾しながら外へと開くもので、坏部下端で屈曲し稜線を形成する。器面調整は不明である。4は坏部下半に丸みを持つもので、脚部はゆるやかに外反しながら開く。器面調整は外面の坏部下半が粗いナデ、脚部が単位の細かいミガキに近いナデである。5は4と同様に坏部下半に丸みを持ち、脚部がゆるやかに外反しながら開くも



層 号	土 色	土 質	備 考
1	灰褐色 (1095/1)	砂 質 土	しまりあり。
2	褐色 (1095/1)	砂 質 土	10 層 2/1 褐色土質土をコアップ状に包み込む。しまりあり。
3	灰褐色 (1093/1)	砂 質 土	地山の土を少量含む。しまりあり。
4	灰褐色 (1093/1)	砂 質 土	しまりあり。
5	灰褐色 (1093/2)	砂 質 土	1.5 層 上は、褐色砂質土をコアップ状に包み込む。地山の土を少量含む。しまりあり。
6	灰褐色 (1094/2)	砂 質 土	地山の土を少量含む。しまりあり。

第13図 S D105号方形四溝基

ので、底部は丸みを持ち、径が小さい。内面には輪積み痕が見られた。6は壺の口頸部の資料で、ゆるやかに外反する頸部のほぼ中央に突帯が巡る。器面調整はヨコナデやナデが施されている。

b. 方形周溝墓

S D 105 方形周溝墓

[位置] A区の西側北寄りに位置している。開田の際に削平を受けており、周溝に囲まれた内側からは盛土や土壌などの遺構は確認できなかった。確認面は地山である。

[重複] S I 101・S I 109・S I 110住居跡、S D 111円形周溝、S D 108・S D 121溝跡、S K 107土壌と重複しており、S D 105はS D 121より新しく、他のS I 101・S I 109・S I 110、S D 108・S D 111、S K 107よりも古い。

[平面形・規模] 平面形は、東側の北端部をS I 109をS I 110に切られているため不明であるが、周溝の位置関係から、隅の丸い正方形であると思われる。周溝南側中央に周溝の切れた部分がある。規模は周溝で囲まれた内側部分が南北約9.6m、東西約10.2mで、周溝部を含めた全体の規模は南北長約12m、東西長約11.5mである。周溝の幅は、東側周溝が約1.2m～2.3m、西側周溝約0.8～1.3m、南側周溝約0.8～2.1m、北側周溝約0.6～1.7mである。周溝の側面はゆるやかに立ち土がり、深さは残存状況で11～32cmである。方向は西辺が真北から約7°東に偏している。

[堆積土] 堆積土は自然堆積で砂質土からなり、6層に分かれる。1～5層が黒色ないしは黒褐色を呈し、6層は地山に似た暗灰黄色を呈する。

[出土遺物] 図示しなかったが、周溝内堆積土から古墳時代埴釜式期の土師器甕などが出土している。

2. 平安時代

主な遺構としては建物跡があり、この他多数の土壌・溝などを検出している。

建物跡は、A区で1棟(S B 133)、B区で5棟(S B 216・219・220・240・241)、C区で1棟(S B 313)の7棟を検出している。いずれも掘立柱建物跡で、地山面で検出している。ここでは整理が一応終了したS B 216・240・241・313の4棟について記述する。

S B 216建物跡(第14・15図)

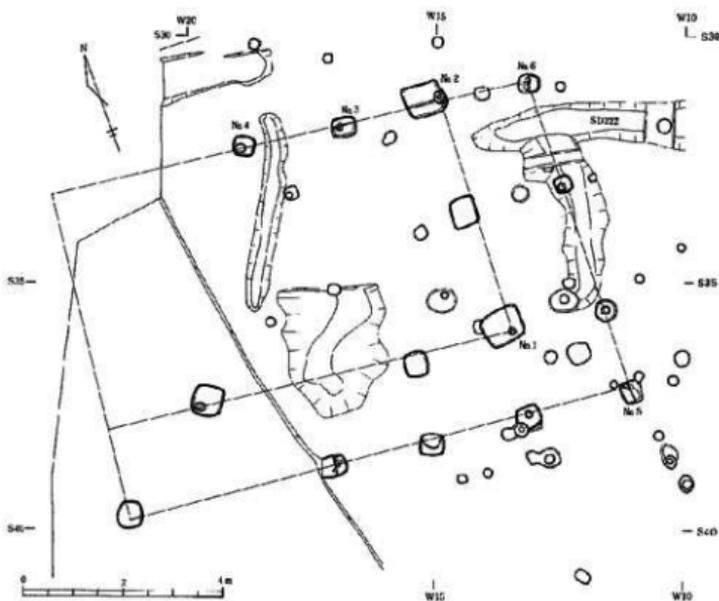
B区の西端部中央で検出した東西5間、南北3間の南および東廂付の東西棟建物跡である。今回の調査では、西妻で南側柱列の柱穴を検出しているだけであるが、昨年度の確認調査で身舎の西妻の柱穴3個を検出していることから、本建物跡は東西5間であることが判明している(真山:1991)。

柱穴は身舎で7箇所、廂で8箇所検出している。このなかの身舎の5箇所で柱材が残存

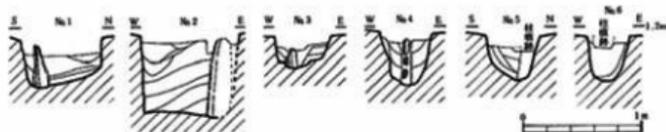
しており、その他5箇所の柱穴で柱痕跡を確認している。方向は身舎の東妻でみると真北に対して北で東へ約1度偏している。

柱穴は、大きさ、形状に多少バラツキが認められる。身舎では東妻南北両端の柱穴が一辺0.7~0.8mほどの方形で最も大きく、それ以外は0.4~0.5m前後の方形、廂が一辺0.5m前後の方形・円形となっている。壁はほぼ垂直に掘られており、深さは最も良好な身舎の南東隅の柱穴で約80cm残っていたが、それ以外は20~30cmほどで残存状況は良くない(第15図)。埋土は、身舎・廂とも黄褐色砂質土(地山)小ブロック・小粒・細粒を含む黒褐色砂質土が主体である。柱は遺存しては柱材や柱痕跡からみると径15~20cmである。

柱間寸法は、身舎の桁行が南入側柱列では東より2.05m・4.41m(2間分)・不明、東から3間分の長さは6.45mである。また北側柱列では東より2.11m・2.04m・不明(2間分)、東側2間分の長さは4.14mである。以上から柱間寸法は2.1m前後、桁行総長は約8.4mと推定される。梁行は東妻で総長4.98m、柱間寸法は南より2.62m・2.36mである。廂は



第14図 SB216建物跡



第15図 S B216建物跡・柱穴断面図

南の出が東端で1.56m、東端から西へ1間目で1.69mである。東廂の出は南端で2.08m、北端で1.77mと、北で西へ少し偏している。

遺物は柱穴埋土から土師器の坏・甕の小破片が少量出土している。

S B 240建物跡（第16・17図）

B区の北端部中央で検出した東西3間、南北3間の南廂付の東西棟建物跡である。本建物跡は、S D211溝と重複しこれより新しい。またS B241建物跡とも重複しているが直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。

柱穴は14箇所すべてで検出している。このなかの身舎の1箇所柱抜取穴を、それ以外の13箇所柱痕跡を確認している。方向は南入側柱列でみると、真北に対して北で東へ約1度偏している。

柱穴は、身舎が一边0.6～0.9mほどの方形、一边0.6m前後の正方形、廂が一边0.5m前後の不整形と廂のものは身舎に比べて大きさが一回り小さく、またそれぞれ大きさ、形状に多少バラツキがある。壁はほぼ垂直に掘られており、深さは30～40cm残っているだけで残存状況はあまり良くない（第17図）。埋土は、身舎・廂とも黒褐色土や灰黄褐砂質土（地山）小ブロック・小粒・細粒を含む黒色砂質土である。柱は柱痕跡からみると径15～20cmである。

平面規模は、桁行が南入側柱列で総長6.91m、柱間寸法は東より2.46m・2.20m・2.29m、南側柱列で総長6.62m、柱間寸法は東より2.28m・2.32m・2.02m、梁行は東妻で総長5.3m、柱間寸法は南より2.74m・約2.5mである。廂は南の出が東端で1.82m、西端で1.76mと多少東で南へ偏している。

遺物は柱穴埋土から土師器の坏・甕の小破片が少量出土している。

S B 241建物跡（第16・18図）

B区の北端部中央で検出した南北4間以上、東西1間の南北棟建物跡である。S I 205竪穴住居跡、S B 240建物跡と重複しており、S I 205より新しいが、S B 240とは直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。

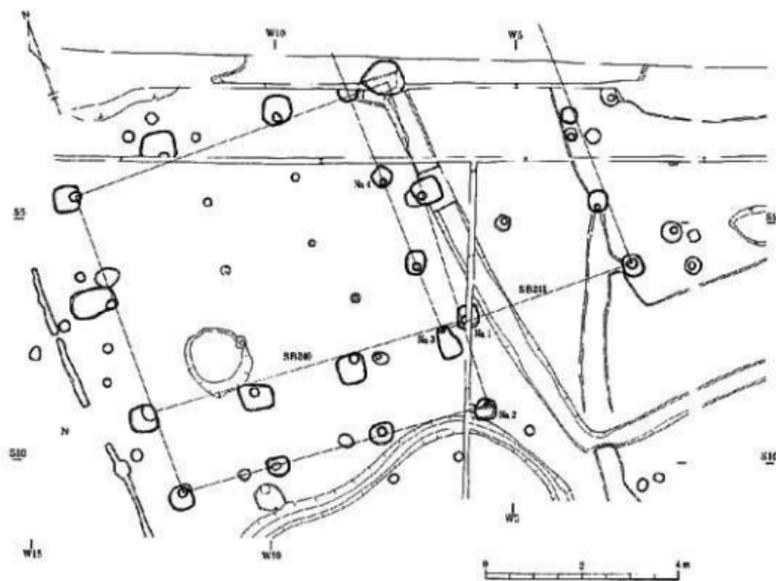
建物跡北半は調査区外で不明であるが、横穴を7箇所検出している。このなかの1箇所

所で柱材が遺存しており、それ以外の4箇所では柱痕跡を確認している。方向は南妻でみると、ほぼ真北方向である。

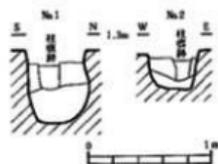
柱穴は、長辺0.7m、短辺0.5mほどの不整形、径0.3~0.5mほどの円形・不整形円形であり、形状・大きさにバラツキがある。壁はほぼ垂直に掘られており、深さは約30cm残っているだけで残存状況はあまり良くない(第18図)。埋土は黄褐色砂質土(地山)小ブロック・小粒・細粒を含む黒色砂質土である。また西側柱列南端の柱穴では、埋土に灰白色火山灰の小粒やブロックが認められる。柱は遺存した柱材や柱痕跡からみると径15~20cmである。

平面規模は桁行総長が不明であるが、梁行は南妻で総長4.45mである。柱間寸法は桁行が西側柱列で南より1.41m・1.81m・2.12m・不明、東側柱列で南より1.38m・1.98m・不明となっており、北側ほど長くなっているようである。

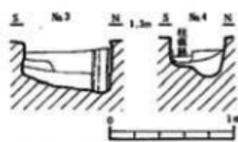
遺物は、いずれも破片資料であるが、土師器の坏・甕、須恵器の甕、須恵系土器坏が柱穴埋土より少量出土している。



第16図 S B 240・241建物跡



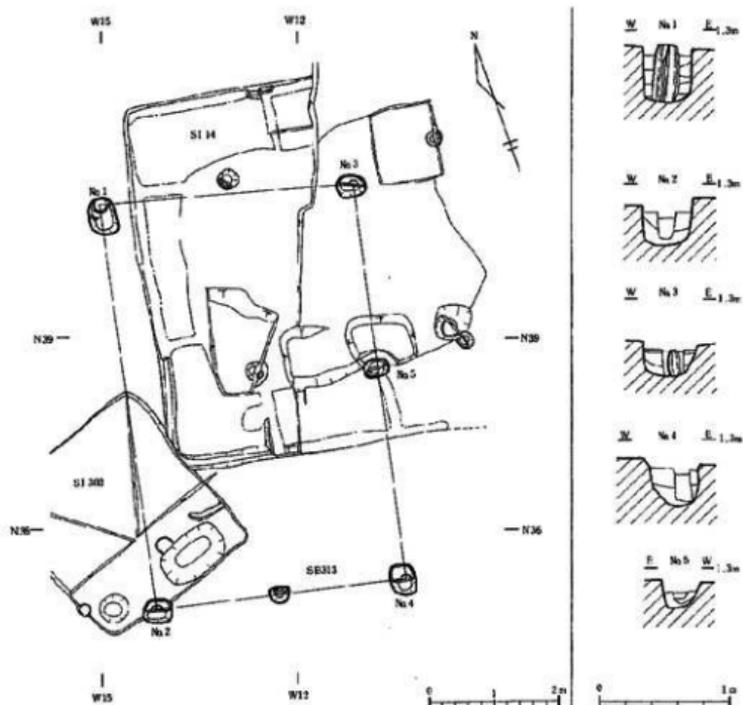
第17図 SB240建物跡穴断面図



第18図 SB241建物跡柱穴断面図

S B313建物跡 (第19図)

C区の西半部中央付近で検出した南北2間、東西2間の南北棟建物跡である。S I 14・303
 堅穴住居跡と重複しこれより新しい。柱穴は6箇所で検出している。このなかの1箇所で



第19図 SB313建物跡・柱穴断面図

柱材が遺存しており、それ以外の5箇所では柱痕跡を確認している。方向は西側柱列でみると、真北に対して北で東へ約10度偏している。

柱穴は、短辺0.4m、長辺0.6mほどの方形、一辺0.5m前後の歪んだ長方形・正方形・円形と形状・大きさにかなりバラツキがある。壁はほぼ垂直に掘られており、深さは東西両側柱列北端のものでは40cm前後残っているが、棟通り下のものは約20cmしか残っておらず、残存状況はあまり良くない(第19図)。埋土は、黒色土や黄褐色砂質土(地山)小ブロック・小粒・細粒を含む黒褐色砂質土である。また西側柱列北端の柱穴では、埋土に灰白色火山灰小ブロックが認められる。柱は遺存した柱材や柱痕跡からみると径15~25cmである。

平面規模は、桁行総長が西側柱列で6.38m、東側柱列で6.22m、柱間寸法は東側柱列で南より3.29m・2.93m、梁行は総長が北妻で3.89m、南妻で3.98m、柱間寸法は南妻で東より1.98m・2.00mである。遺物は出土していない。

3. その他の遺構

その他の遺構として、長期間存在した水田跡と河川跡がある。

a. 水田(第20・21図)

[概要] A区東半部とB区南端部で4時期の水田跡(I~IV)を検出した。水田は、A区の西側に広がる微高地から、A区の南端部を東西に延びる河川跡へとゆるやかに続く低地に作られており、B区も同様にA区へと連続する低地にある。耕作土は低地に堆積した粘質土を耕作土として作られている。

A区では、道路建設直前の旧水田耕作土(1層)を除去後、調査区東側の2a層上面で水田跡Iの疑似畦畔とSD139・SD140溝を検出した。調査区北側中央部では耕作土に10世紀前半に降下したと考えられている灰白色火山灰をブロック状に含む水田跡IIIの疑似畦畔を検出し、この水田は南東部には広がらないことを確認したが、西側への広がりを捉えることはできなかった。調査区南東部では、3層除去後に灰白色火山灰に覆われた水田跡IVの畦畔とSD141溝を検出した。

B区では、3層を除去後に3層を耕作土とする水田跡IIの疑似畦畔を検出し、また、水田跡IIの下にA区の水田跡IIIに対応すると思われる灰白色火山灰をブロック状に含む水田の耕作土があることを確認した。断面観察によって、この水田跡の疑似畦畔が水田跡IIの疑似畦畔とほぼ同じ位置にあることを部分的に確認したが、時間的な制約により全面にわたる疑似畦畔の把握は行っていない。

次に重複関係であるが、A区では水田跡IIIがSD121溝とSD138溝と重複し、いずれも水田の方が新しい。さらに、水田跡IVがSD139と重複し、SD139が水田跡IVより新しい。遺

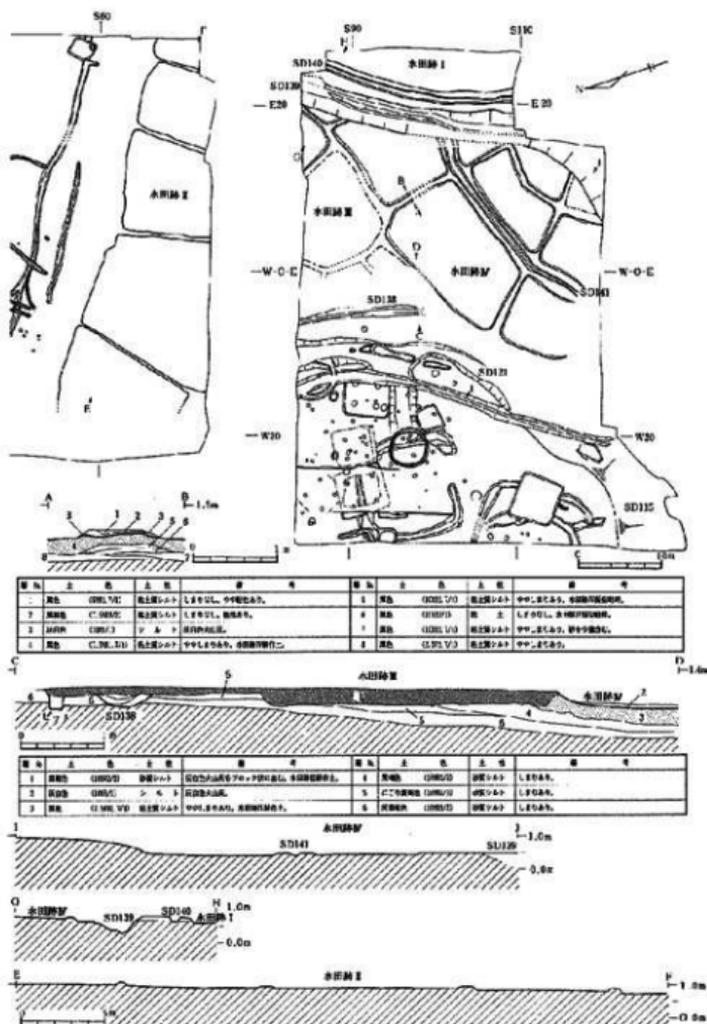
物は、耕作土中から古墳時代から平安時代にかけての土器片が出土している。なお、旧水田面の標高はA区の西側が1.1m前後、東側が1.0m前後、B区の西側が1.2m前後、東側が1.1m前後であった。以下、各時期毎に説明していく。

[水田跡Ⅰ] 2a層上面で平行する2本の擬似畦畔とS D 139・S D 140溝を検出した。検出面の標高は0.8m前後である。2a層はA区の南東部に広く認められ、水田はS D 139の東西に作られていたものと考えられるが、水田に伴う遺構を確認できたのは東端部のみであった。擬似畦畔は真北から20～30°東に偏しており、やや湾曲しながら東北東に伸びてゆく。西側の擬似畦畔の幅は上幅で80～168cm、東側の擬似畦畔が60～86cmであった。西側の擬似畦畔の方がよりしっかりしたものであることがわかる。水田はさらに調査区の東側に広がっているため、水田1枚の面積・形状は不明である。S D 139は擬似畦畔の西側を平行して伸びており、南端部で西よりに曲がる。また、S D 140は2本の擬似畦畔に挟まれた溝で、いずれも水田への給排水のためのものと考えられる。S D 139は幅が3.0～3.4m、深さは60cm前後であった。S D 140は幅が51～92cm、深さが4～17cmであった。

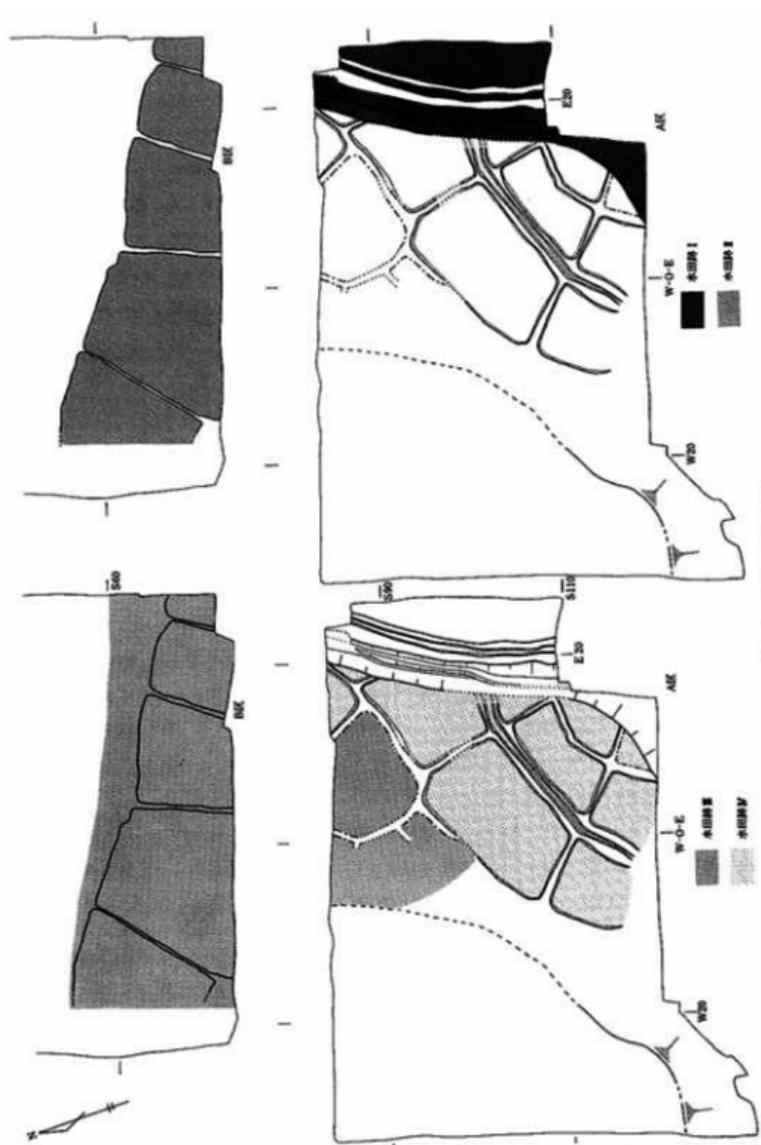
[水田跡Ⅱ] B区の南端部のA区とB区の間には挟まれた低地にあり、3層を剥いだ際に、ほぼ東西に並ぶ5枚の水田跡を検出した。A区とB区の間には挟まれた低地にある。3層を耕作土としており、下面には凹凸が認められた。擬似畦畔は真北から20～50°東に偏しており、おおそ北東に伸びる。擬似畦畔の上幅は20～70cmほどで、西側で検出した擬似畦畔が他に比べて細い。水田1枚の面積・形状は南半部が未調査のために不明であるが、確認できる部分の状況を見てみると、北辺の長さは8～12m、東辺の長さは約16mである。各水田の耕作土下面の標高は、西側の水田から順にみっていくと、1.0m、0.9m、0.9m、0.8m、0.8mとなり、西から東へと低くなっていることがわかる（第20図）。

[水田跡Ⅲ] A区の北側中央部で、耕作土に灰白色火山灰をブロック状に含む水田の擬似畦畔を検出した。確認面の標高は0.9m前後である。東側は水田跡Ⅰにより壊されており、また、南東部の低くなっている部分には広がらないことを確認した。なお、調査時の認識不足のため、西側への広がりを捉えることができず、擬似畦畔の記録は平面と一部断面で確認したに留まった。擬似畦畔の幅は60～100cmほどで、水田1枚の面積と形状については不明だが、方形ないしは台形を呈するものと思われる。B区南端部の水田跡Ⅱの下で確認した水田跡も、耕作土に灰白色火山灰をブロック状に含むこと、検出した標高もほぼ同じことからこの時期のものと考えられる。

[水田跡Ⅳ] A区の南東部で、灰白色火山灰に覆われた水田跡10枚とS D 141溝を検出した。5層を耕作土としており、下面にはあまり顕著ではないが乱れが認められた。畦畔は、上幅が20～150cm、下幅が50～180cmと値に幅がある。畦畔の高さは水田面から2～17cm



第20図 A・B区水田平面図・断面図・エレベーション



第21図 A・B区水田模式図

であった。水田の平面形は、全体の状況を把握できるものが2枚あり、それらはいずれも方形を基調とし、1つは長辺が14～17m、短辺が9～11m、面積は150～160㎡で、もう1つは長辺が9～13m、短辺が5～6m、面積が50～60㎡であった。水田は傾斜に対して平行に3～4列細長く並んでおり、それらの水田が形成する細長い列の間に給排水のものと思われるS D141が伸びている。S D141は幅36～120cm、深さは7～14cmであった。各水田面の標高は、水田1が0.8m前後、水田2が0.7m前後、水田3が0.6m前後、水田4が0.5m前後、水田5が0.4m前後、水田6が0.4m前後、水田7が0.5m前後、水田8が0.5m前後、水田9が0.5m前後、水田10が0.5m前後であった。東西のエレベーションを見てもわかるように、S D141を挟んで2列に並ぶ水田が低く、また、さらに南側のものが最も低いことがわかる。

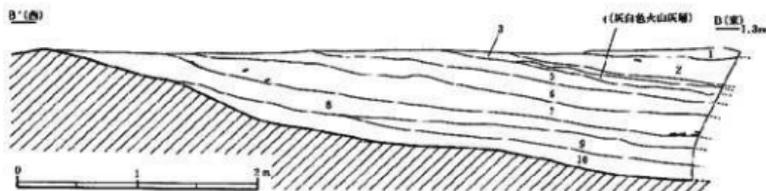
b. 河川跡

A区の南端部で東西方向に続くS D115河川跡と、B区からD区にかけて南北方向に続くS D302河川跡の2条を検出しており、S D302はD区で東西方向の河川と合流している。またS D302とS D115はA区の東側の調査区外で合流しているとみられる。

S D302河川跡(第5・22図)

B区の北東隅からC区の中央部、そしてD区の西半部にかけての地山面で検出した南北方向の河川跡で、さらに調査区外へ続いている。C・D区では、東・西兩岸を検出しているが、B区では西岸を部分的に確認できただけである。またD区の南半部では、西側から延びてくる河川と合流している。堆積層は層の特徴および遺物の出土状況からみると、概ね3時期(古い方からA→B→Cとする)に分けて捉えることができる(第5図のS D302断面図)。方向は、時代によって多少変わるがおよそ南北方向である。なお第5図のS D302の断面図と第22図の層位はそれぞれ対応している。

最も古いAは、古墳時代の遺物を含む堆積層の下に堆積している弥生時代から流れていたと考えられる河川跡である。黒褐色粘土と厚さ1～2cmほどの茶褐色スクモ層を含む黒味を帯びた青灰色砂層である。幅は25m以上で、深さは湧水のため底面を確認できず、2.5



第22図 S D302断面図(C区南端部)

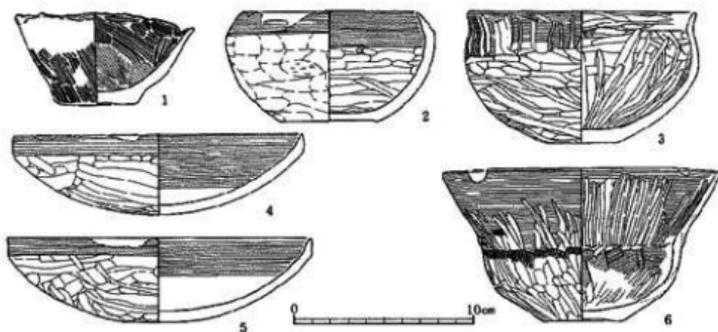
m以上である。このなかで黒褐色粘土層からは、多量の自然木が出土している。

Bは、古墳時代から10世紀前半頃以前の平安時代にかけての河川である。幅は約25m、深さ約2mで、河川の底面は現在の標準海面より低い。堆積層は古いものからみると、厚さ1~2cmほどの茶褐色スコム層を含む青灰色砂層（第5図の9a層）。黒色~黒褐色粘土（5~8層）、黄褐色粘土（5A・6A・7A・8A層）である。このBの堆積層の直上には、10世紀前半頃に堆積したと考えられている灰白色火山灰層（4層）が見られる。

Cは10世紀前半頃以降の河川で、幅は深い部分が5~7mと古墳時代に較べるとかなり狭くなり、流路は西側寄りになる。深さは約1.7mである。堆積層は、暗黄褐色粘土（3層）、多少スクモ化した黒色土・黒褐色土（2層）、褐色粘土（1層）で、3B層には多量の灰白色火山灰ブロックが見られる。

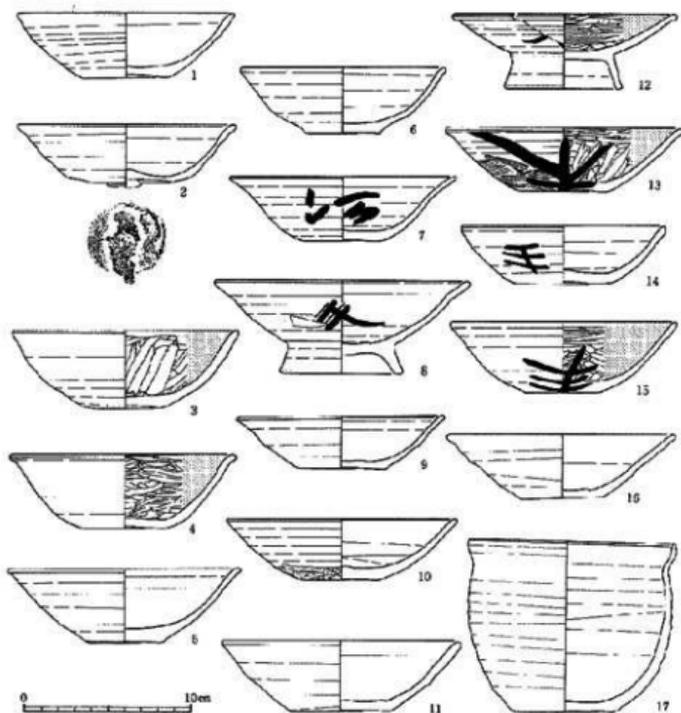
遺物は、各時代の堆積層から出土している。Aからはいずれも破片資料であるが少量の弥生土器が出土している。この中には枡形罎式の甕の体部破片がみられる。

Bでは8~5層から多量の土器の他、木製品（第25図）・石製模造品（図版17の4）が出土している。土器は古墳時代前期の壺釜式から中期の南小泉式を中心とした土師器であり、河川全体から万遍なく出土するのではなく、C区の南・北両端部付近の西側斜面から集中して出土している（図版10の下）。また第23図の4・5は5層から出土した土師器の坏で、丸底で口縁部が直立するものである。調整は口縁部外面がナデ調整、体部がヘラケズリ調整、



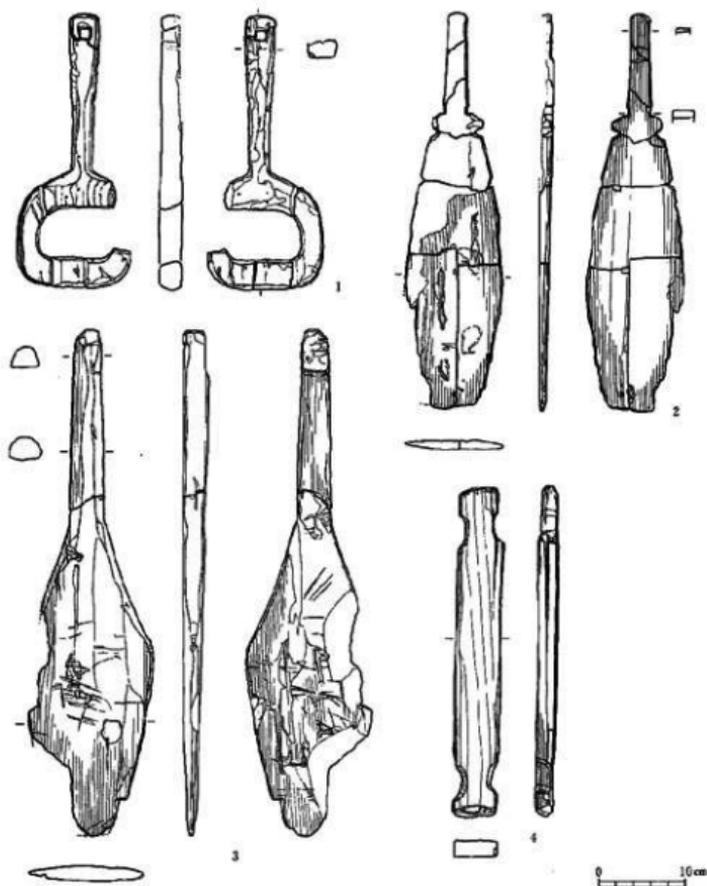
図号	層別	形状	名前の調査	内容の調査	産地	口径	底径	高さ	備考	写真No.
1	上段	甕	ハナ型		ハナ型ナデ	9.5	4.5	3.7	口縁部調整	14-5
2	上段	甕	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ調整の10号	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ調整		9.5	5.4	8.1		14-6
3	上段	甕	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ調整の10号	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ調整		13.4	4.8	7.5		14-4
4	上段	甕	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ調整の10号	口縁部：ヨコナデ	丸底	14.4	—	6.3	内外面にワシジロが施されている	14-7
5	上段	甕	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ調整の10号	口縁部：ヨコナデ	丸底	16.5	—	6.7	内外面にワシジロが施されている	14-8
6	下段	甕	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ調整の10号	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ調整		15.5	4.4	8.3		

第23図 S D 302出土土物(2)



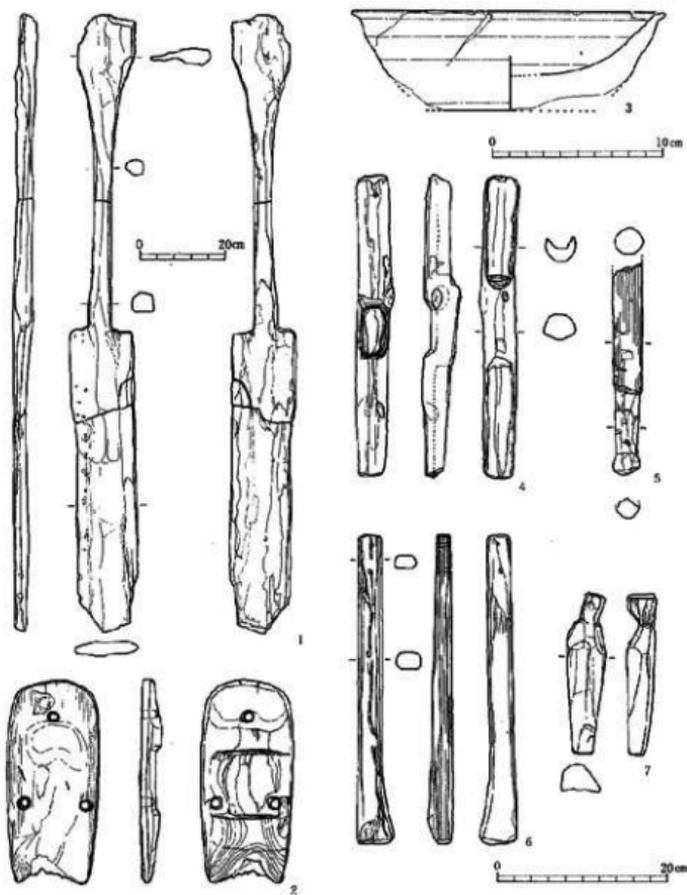
番号	器名	口径	高さ	底径	内径	外径	底厚	口縁厚	器高	重量	出土状況
1	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
2	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
3	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
4	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
5	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
6	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
7	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
8	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
9	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
10	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
11	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
12	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
13	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
14	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
15	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
16	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8
17	深鉢	14.5	10.5	5.5	5.5	5.5	0.8	1.2	10.5	1.8	II-8

第24図 S D302出土遺物(1)



番号	種類	部位	長さ	幅	厚さ	備考	写真図版No.
1	櫛	櫛	33.9	(13.2)	最大厚 2.6cm	櫛の基部一部破損 (櫛の基部内径約 2 cm)	15-1
2	櫛	櫛	53.9 (柄13.8)	最大 13.2	最大 1.6cm	櫛の基部一部破損 櫛の厚さ 1.1cm	15-3
3	櫛	櫛	58.9 (柄22.3)	最大幅15.4	最大 2.3cm	櫛の基部一部破損 櫛の厚さ 3.2cm	15-2
4	平削	平削	28.1	最大幅 3.1	2.1cm	1段削形	15-4

第25図 S D302 出土の木製品②



番号	種類	部位	長さ	幅	厚さ	備考	写真図版号
1	杖	3点揃	145.7	最大 15.0cm	4.6cm	法文宛外木製品	18-8
2	F 杖	3点揃	(21.0cm)	最大 10.7cm	3.5cm	一様断面	18-10
3	鉢	3点揃	横径最大 14.9	最大 5.9cm	厚さ 3.9cm	一様断面	18-11
4	牙 刺	3点揃	25.4	最大 4.0cm	最大 4.2cm	法文宛品	18-9
5	輪 刺	3点揃	(19.043上)	歯縁最大 3.7cm		公平館中継	18-12
6	針	3点揃	20.0	最大 0.3cm	0.2cm	変形	18-5
7	細シヤ	3点揃	13.7	最大 4.6cm	最大 3.3cm	逆形異型?	18-3

第26図 S D302出土の木製品(1)

内面が回転のナデ調整されており、内外面とも漆が塗られている。

木製品は4点出土しており、この中には木製の輪鏝（第25図の1）がある。破損しているが、全体形を把握できる資料である。この他2は鋤、3は鋤あるいは鎌であり、4は両端部に挟りを持つ板状のもので、用途不明である。

Cでは3B層から土器（第24図）と木製品の他、鹿の骨・角（図版17の1・3）なども出土している。土器には土師器、須恵器、須恵系土器があり、この中では土師器が最も多い。土師器では坏が多く、特に完形のものが単独あるいは数個まとめて出土している（図版12の下）。また墨書されたもの（第24図の7・8・12～15）もみられる。

木製品には鋤（第26図の1）、椀（3）、横槌（5）、下駄（2）、鎌の柄（6）、鳥型とみられるもの（7）の他、用途不明のもの（4）がある。

S D 115河川跡（第4図）

A区南端部の地山面で検出した東西方向の河川跡で、さらに調査区の東西両側に続いており、A区の東側で前述したS D 302と合流すると考えられる。検出したのは河川の北半部だけであるため規模は不明である。

堆積層は、S D 302と同様に古墳時代以前のもの、古墳時代から10世紀前半頃の灰白色火山灰以前の平安時代にかけてのもの、灰白色火山灰以後のものに大別して捉えられる。古墳時代以前の河川は、深さが湧水のため捉えられず不明である。堆積層は深さ1～2cmのスクモ層を含む青灰色砂層である。遺物は出土していない。

古墳時代から灰白色火山灰以前の平安時代にかけての河川は、深さ約1.5mで、堆積層は黒～黒褐色粘土とスクモの互層である。遺物は少量の古墳時代とみられる土師器・木製品の鎌の柄、平安時代の土師器・須恵器、牛の骨などが出土している。

灰白色火山灰以後の河川は深さ約1.0mで堆積層は黒褐色砂質粘土、オリーブ灰色粘土などである。遺物は少量の古墳時代の土師器、平安時代土師器・須恵器・須恵系土器が出土している。

V . 調査の成果

今回の調査では、竪穴住居跡31、掘立柱建物跡7、方形周溝墓2、円形周溝6、水田跡、河川跡をはじめ、多数の溝・土壌などを検出した。そしてこれらの遺構の中では特に竪穴住居跡・河川跡から土器をはじめとした遺物が比較的多量に出土している。また河川跡からは土器の他に木製品、石製品や牛の骨、鹿の骨・角、植物の種子などの多種多様の遺物も出土している。

ところで本遺跡は昨年度実施した確認調査の結果、古墳時代から平安時代の集落跡と考

えられており、各遺構から出土した遺物を概観し、また遺構と灰白色火山灰との関係からみて、今回検出した遺構も概ね古墳時代の竪穴住居跡・方形周溝墓などと平安時代の建物跡・水田跡(Ⅳ)などの2時期の遺構群に分けて捉えられると考えられた。また河川跡は、古墳時代以前から平安時代にかけて流れていたものであることが判明した。そこで前章では、現段階で一応整理・検討の終了した古墳時代のS I 101・201・301竪穴住居跡・S D 105方形周溝墓、平安時代のS B 216・240・241・313建物跡、いくつかの時期にわたる水田跡、河川跡の一部の順に説明してきた。以下ではまずこれらの遺構について時期・年代を検討し、次にその他の遺構で現段階で時期・年代が捉えられるものについて整理し、最後に本調査の成果についてまとめてゆくことにする。

1. 遺構の時期・年代

a. 竪穴住居跡

S I 201住居跡では床面から土師器の坏7点、高坏1点、壺3点、甕4点の他、須恵器の甍を模倣した土器が出土している。この中で最も量が多い坏をみると、体部がほぼ直線的に外傾しながら立ち上がり口縁部との境で屈折するもの、体部が内湾して緩やかに立ち上がり屈折することなく口縁部に続くものなどがある。これらは古墳時代中期の南小泉式の坏にみられる一般的な特徴に共通するものであり、その他の器種の特徴も南小泉式の特徴に含まれるものと考えられることから、S I 201は南小泉式期に位置付けられる。

年代については、須恵器を模倣した甍の存在からある程度推定される。この土器は、体部が算盤玉のような形をなし頸部が比較的細い。口縁部はさほど高くなく外反して上方へ広がり、外面に段が認められる。このような特徴と類似する須恵器の甍は、仙台市大連寺窯跡から出土している。大連寺窯跡は陶邑編年(田辺昭三:1981)のTK216に相当し、年代が5世紀後半代といわれている(註1)。したがって須恵器甍を模倣したこの土師器の年代は、5世紀後半代と推定され、S I 201の年代もこの頃と考えられる。

S I 301住居跡では、床面から土師器の坏1点、甕1点、カマドの底面から高坏4点が出土している。坏は体部が内湾して緩やかに立ち上がりそのまま口縁部に続くものである。高坏は坏部が直線的に外傾するものや下半部で屈折し外反するものである。脚部は緩やかに外反しながら開くいわゆる円錐台形であり、孔はみられない。このような坏・高坏の特徴は南小泉式のものの特徴と一致することからS I 301は南小泉式期の竪穴住居跡と考えられる。

S I 101住居跡は、出土した遺物がいずれも破片資料であるが、古墳時代のものと考えられる。

S I 21は昨年度の確認調査で精査しており、その結果時期は南小泉式期に位置付けられて

いる(註2)。

b. 方形周溝墓

S D 105方形周溝墓では、周溝の堆積層からすべて破片資料であるが土師器の坏・甕などが出土している。この中の甕は体部が球形をなし、外面が細かいハケ目調整、内面がハケ目調整の後に一部ナデ調整、口縁部外面は横ナデ調整で粘土紐の接合痕を残しているものである。このような特徴は塩釜式のものと考えられることから、S D 105は塩釜式期に位置付けられる。

c. 建物跡

S B 241建物跡の柱穴埋土からは須恵系土師器の坏が出土しており、また10世紀前半頃降下したと考えられている灰白色火山灰(註3)のブロックがみられた。したがってS B 241の年代は、10世紀前半頃とみられる。この他のS B 216・240・313建物跡については、S B 313が柱穴埋土に灰白色火山のブロックがみられ、また柱穴の規模・埋土の特徴がS B 241の柱穴と類似すること、S B 216・240がS B 241と建物の方向がほぼ同じであり、また柱穴の規模・形状・埋土の特徴が類似することから、いずれもS B 241とほぼ同時期の10世紀前半頃の建物跡と考えられる。

d. 水田跡

I～IVの4時期の水田跡を検出したが、この中で最も古い水田跡IVの耕作土・畦畔が直接灰白色火山灰に覆われていることから、その年代は灰白色火山灰色降下直前の10世紀前半頃とみられる。

e. 河川跡

S D 302河川跡からは、弥生式土器・古墳時代前期～平安時代にかけての土器が出土している。またS D 115河川跡からも古墳時代～平安時代にかけての土器が出土しており、さらに古墳時代以前の堆積層がみられる。したがってS D 302・115両河川は、古墳時代以前から平安時代にかけて流れていたことが窺い知れる。

2. その他の遺構の時期・年代

次に今回報告できなかった遺構について、現段階で判明していることについて簡単にまとめておくことにする。

竪穴住居跡はこの他27軒検出しているが、古墳時代前期の塩釜式期と考えられるものにS I 112・114・202・401が、また古墳時代中期の南小泉式期と考えられるものにS I 103・224・225・15・16・17・22がある。この他に残存状況が極めて悪いものや、時期を特定できる遺物がほとんど出土しなかったS I 102・104・109・110・204・229・230・231・303・305・11・13・14・19・20があるが、いずれも古墳時代の竪穴住居跡である可能性が高いと考え

られる。なお住居跡のカマドは、現在のところ宮城県では南小泉式期に出現するとみられていることから、これらの中でカマドを持つ S I 229・303・19は南小泉式期以降のもの、カマドを持たない S I 109・110・204・230・305・11・13は塩釜式期～南小泉式期の可能性が考えられる。

方形周溝墓では S D 106 方形周溝墓を検出している。遺物は周溝の堆積層から丸い4孔の窓を持つ塩釜式の高坏などが出土していることから、時期は S D 105 と同じ塩釜式期のものと考えられる。

建物跡では S B 136・209・210 建物跡を検出している。これらからは時期を特定できる遺物が出土していないため時期は不明である。

土壌では、S K 122 が出土遺物から塩釜式期のものと考えられる。

この他重複状況から S D 121 溝は、古墳時代前期の塩釜式期の S D 105 方形周溝墓と重複しこれより古いことから、古墳時代以前のものと考えられる。

3. 遺構期の設定

以上を整理すると次のようになる。

I . 重複状況から古墳時代以前の可能性があるもの... S D 121 溝

II . 古墳時代のもの... 竪穴住居跡、方形周溝墓など

a . 塩釜式期と考えられるもの... S I 112・114・202・401 竪穴住居跡、S D 105・106 方形周溝墓、S K 122 土壌

b . 南小泉式期と考えられるもの... S I 103・201・244・245・301・15～17・21・22 竪穴住居跡

III . 10世紀前半頃から中頃を中心とした平安時代のもの... S B 216・240・241・313 掘立柱建物跡、水田IV

この他 S D 115・302 河川跡は、古墳時代以前から平安時代以降まで流れていたことが判明している。なお、この他に検出した主な遺構として円形周溝があるが、その時期・年代や性格については出土遺物から特定できず不明である。

以上のように各遺構は、I は検出した遺構が S D 121 溝だけであるが、II・III それぞれが時期ごとにいくつかの遺構のまとまりとして捉えられることから、I～III 期の遺構期として把握できる。

4. 各遺構期の様相

I 期については、時期・年代が特定できず、検出した遺構も現在のところ S D 121 溝だけのため詳細は不明である。

古墳時代の II 期については、検出した遺構が竪穴住居跡と方形周溝墓であること、また

出土遺物からみて遺跡は一般の集落跡と考えられる。集落は、Ⅱ a 期の塩釜式期には南北に流れる河川（S D 302）の東西両側に、Ⅱ b 期の南小泉式期には S D 302 の西側に営まれていたと想定される。河川の西側に立地する集落については、さらに南北両側も河川（南側は S D 115、北側は D 区で S D 302 に合流する河川）によって限られており、その規模は南北約 250m、東西 50m 以上である。河川の西側に立地する集落では、塩釜式期（Ⅱ a 期）には南端部を中心に竪穴住居跡、方形周溝墓が営まれている。一方南小泉式期（Ⅱ b 期）になると集落は北側にも展開してゆくようになる。竪穴住居跡の占地には、S D 302 河川に沿うように形で立地するものと、河川から少し西側へ離れた地区に位置する異なったあり方を示す 2 群が認められる。

平安時代のⅢ期については、建物跡は廂を持つものも認められるが、いずれも小規模でその配置に計画性が認められないこと、また出土遺物からみて遺跡は一般の集落跡と考えられる。そして集落は、やはりⅡ期の古墳時代の集落同様に、S D 302・115 によって東・北・南を囲まれた場所を選んで営まれている。そして集落の内部では、その中央部にあたる B・C 区を中心に住居である建物跡が分布し、一方この居住域の南東から南にかけての河川に向かって緩やかに傾斜してゆく低湿地部分には生産の場である水田が営まれていることが明らかになった。

5. まとめ

今回の調査では、竪穴住居跡 31、建物跡 7、方形周溝墓 2、円形周溝 6、水田跡、河川跡をはじめとして多数の溝・土塀などを検出した。そしてこれらの中で、竪穴住居跡、建物跡、方形周溝墓、水田跡、河川跡などは、古墳時代以前（Ⅰ期）、古墳時代前期～中期の集落（Ⅱ期）、10世紀前半を中心とした平安時代（Ⅲ期）の集落といった 3 時期の遺構期に分けて捉えられた。

Ⅱ・Ⅲ期の集落跡については、その立地・規模・内部の様相の一端を具体的に窺い知ることができた。集落はⅡ期の塩釜式期（Ⅱ a 期）では南北に流れる S D 302 河川跡の東・西両側に、南小泉式期（Ⅱ b 期）とⅢ期の平安時代には河川の西側に営まれている。そしてこの西側に営まれた集落はさらに北と南も河川によって囲まれた場所を選んで立地している。

S D 302 の西側に立地する集落の規模は、東・南・北を河川によって囲まれていることから、南北約 250m、東西は 50m 以上である。

古墳時代の集落内の様相については、塩釜式期では河川に囲まれた地域の南端部を中心に竪穴住居跡と方形周溝墓が営まれており、中期の南小泉式期ではさらに北側にも竪穴住居跡が展開してゆくことが明らかになった。

平安時代の集落では、中央部に住居である建物跡が散在し、その南から南東部の湿地部分で水田が営まれていることが判明した。

遺物は、竪穴住居跡・河川跡を中心に比較的多量出土している。遺物には最も多く出土した土器の他、石製品、土製品、木製品、牛の骨、鹿の骨・角や植物の種子などもみられる。

土器では土師器・須恵器・須恵系土器がみられ、この中では土師器が圧倒的に多い。土師器の中には、在地のものの他に第23図4・5のように関東地方の下総北部から栃木県にかけて分布する土師器の坏と極めて類似した特徴を持つものもみられ、その年代は6世紀後半から7世紀前半頃とみられる。(註4)。

石製品には石製模造品や砥石、土製品には土玉や土鍾がある。木製品には、鋤、鍬、下駄、鎌の柄、椀などの他輪鍔がある。木製の輪鍔は古墳時代のもので古墳出土以外の鍔としてきわめて貴重な資料である。

註

- 註1. 古窯跡研究会「仙台市大寺窯跡発掘調査報告書」『陸奥国官窯跡群Ⅱ』古窯跡研究会研究報告第4冊 1976
註2. 真山悟「Ⅴ. 考察」『藤田新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第142集 宮城県教育委員会 1991 P.18-22
註3. 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所 1980 P.1-38
註4. 田熊清彦(栃木県教育委員会)、梁木誠(宇都宮市教育委員会)、長谷川厚(神奈川県立埋蔵文化財センター)の御教示による。

<引用・参考文献>

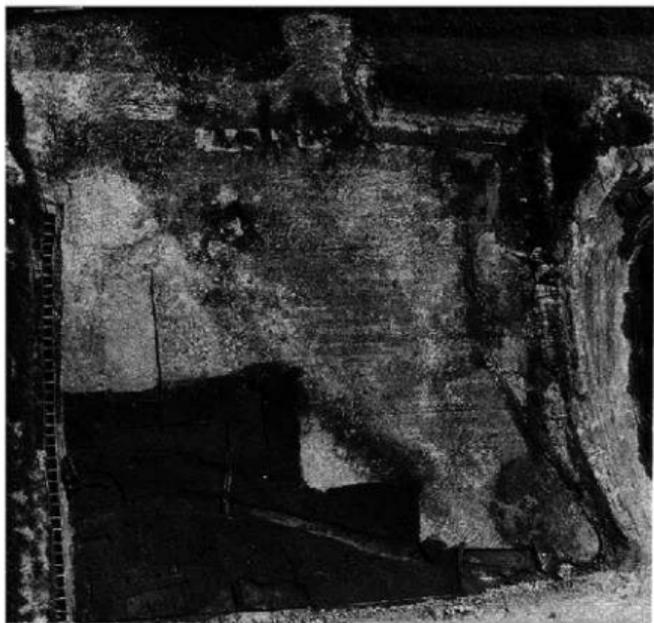
- 阿部・須田・岩見(1991):「新峯崎遺跡」『宮城県村田町文化財調査報告書』第9集 村田町教育委員会
伊東信雄(1957):「古代史」『宮城県史』第1巻
氏家和典(1957):「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯東北史学会
太田昭夫(1980):「大橋遺跡-東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第71集 宮城県教育委員会
加藤道男(1989):「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
兼田芳宏(1987):「宮城県仙台市南小泉遺跡」『埋蔵文化財発掘調査研究所報告書』第4集 南小泉遺跡調査団・埋蔵文化財発掘調査研究所
日下部喜己他(1980):「付編 矢ノ目遺跡出土遺物-祭祀遺物-(伊達西部地区遺跡所収)」『福島県文化財調査報告書』第82集 福島県教育委員会
佐藤 洋(1987):「六反田遺跡Ⅲ」『仙台市文化財調査報告書』第102集 仙台市教育委員会
佐藤 洋(1987):「南小泉遺跡-第14次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第109集 仙台市教育委員会
佐藤・菅原他(1991):「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第141集 宮城県教育委員会
白鳥・加藤他(1974):「岩切ノノ果遺跡-東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』第35集 宮城県教育委員会
高倉敬明他(1981):「山王遺跡-山王・高崎遺跡発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第2集。多賀城市教育委員会
田辺昭三(1981):「須恵器大成」

- 手塚 均 (1980) : 「留沼遺跡- 東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ」 『宮城県文化財調査報告書』第65集
宮城県教育委員会
- 丹羽・柳田・阿部 (1981) : 「西野田遺跡- 東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」 『宮城県文化財調査報告書』
第35集 宮城県教育委員会
- 丹羽・阿部・小野寺 (1981) : 「清水遺跡- 東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」 『宮城県文化財調査報告書』
第77集 宮城県教育委員会
- 丹羽 茂 (1983) : 「宮前遺跡」 『宮城県文化財調査報告書』第96集 宮城県教育委員会
- 松本秀明 (1984a) : 「海岸平野にみられる浜提列と完新世後期の海水準微変動」 『地理学評論第57巻第10号』P. 720 - 738
- 松本秀明 (1984b) : 「沖積平野の形成過程からみた過去一万年間の海岸線変化」 『宮城の研究- 考古学篇』

写 真 图 版



図版1 道野温泉（西から）



A区
全景
(上が東)



B区
全景
(上が東)

図版 2

C区
全景
(上が東)



B・C区
全景
(上が東)



図版 3



A区西半部全景
(北から)



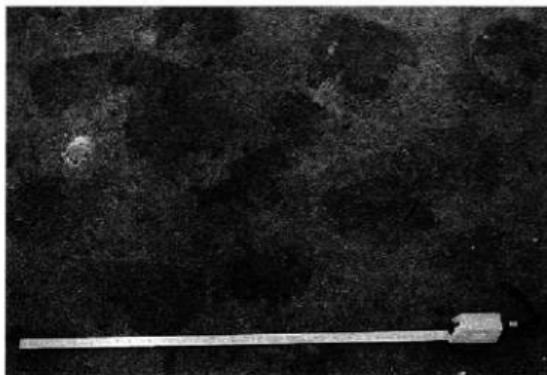
A区S1101
ビット1・5断面
(南から)



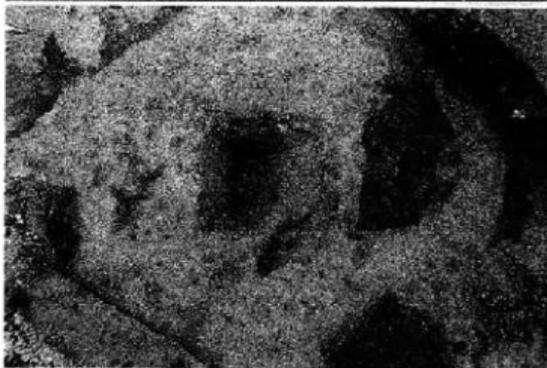
A区S1101掘り方断面で
検出された遺跡①
(西辺部分)

図版 4

A区S1101掘り方底面で
検出された痕跡②



A区S1101掘り方方面で
検出された痕跡③
(北側面)



A区水田跡層確認状況
(南から)



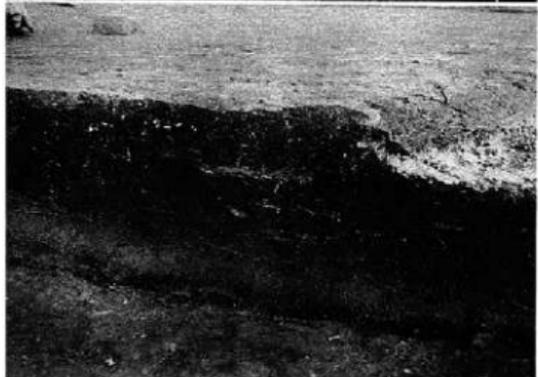
図版 5



A区水田跡Ⅰ (写真奥)
水田跡群 (写真手前)
(北西から)



A区水田跡群触脚断面
(南から)



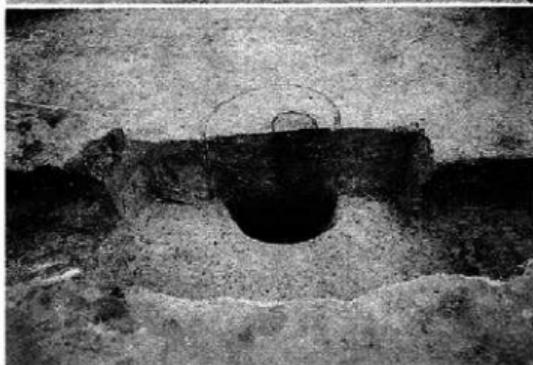
A区水田跡道及び
水田跡群の断面
(南から)

図版 6

B区S1201 (西から)



B区S1201ピット2断面
(西から)



B区S B216 (南から)



図版 7



B区S B216柱穴No.2 断面



B区S B216柱穴No.1 断面



B区S B240 (南から)

図版 8

B区 S 1202・S B241
S B205 (南から)



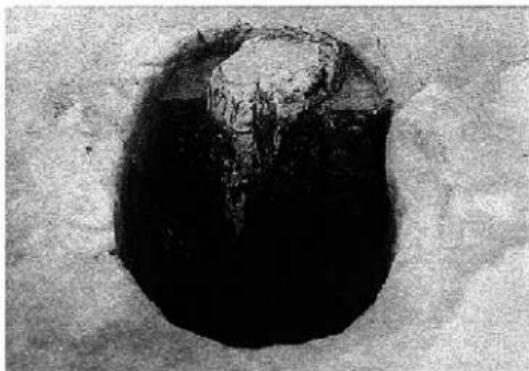
B区水田跡Ⅱ
(北西から)



C区 S 1301 (西から)



図版 9



C区S B313柱穴No.1 断面



C区S B313柱穴No.3 断面



C区S D302遺構出土状況①
南端部西側斜面 (裏から)

図版10

C区 S D302
遺物出土状況②



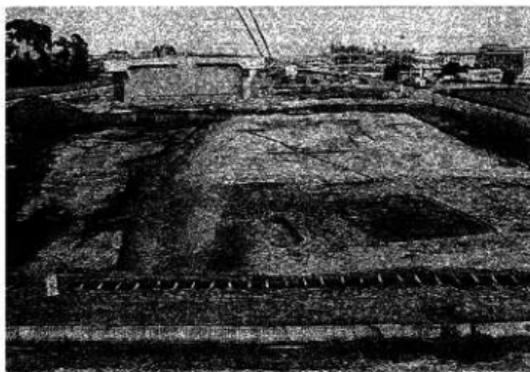
C区 S D302
遺物出土状況③



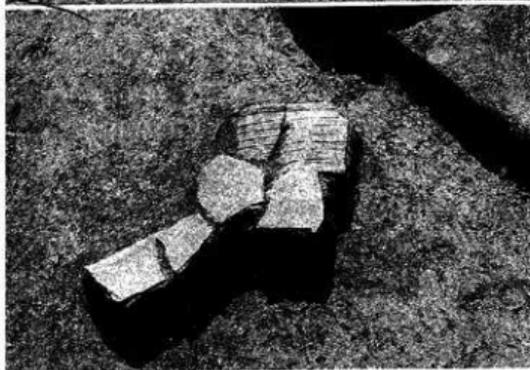
C区 S D302
遺物出土状況④



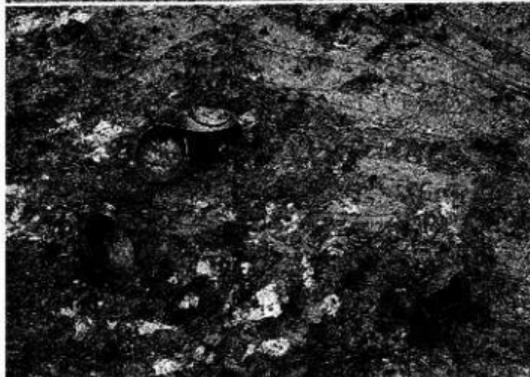
図版11



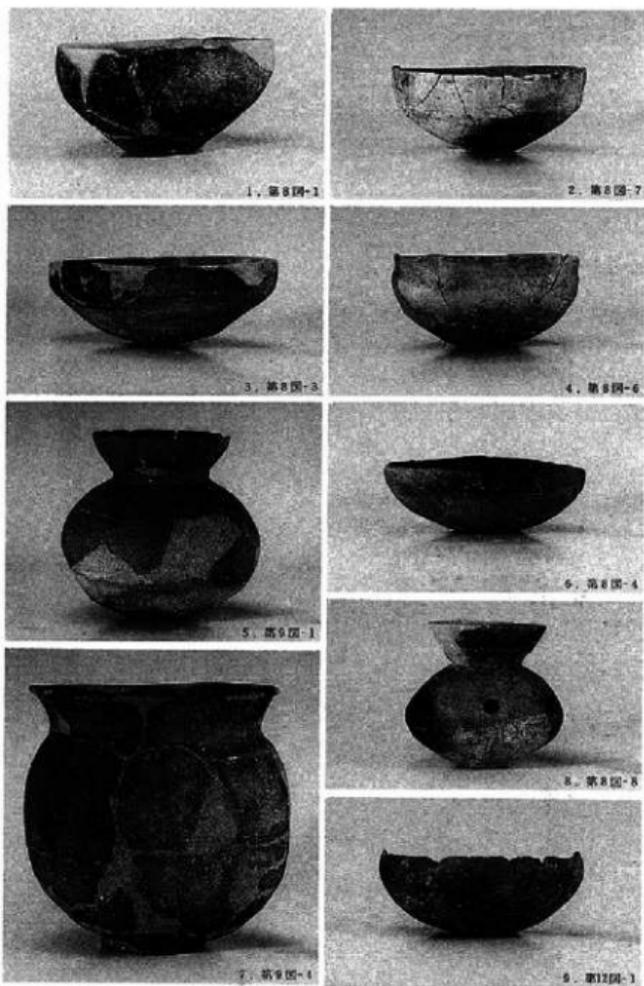
D区調査区全景
(南から)



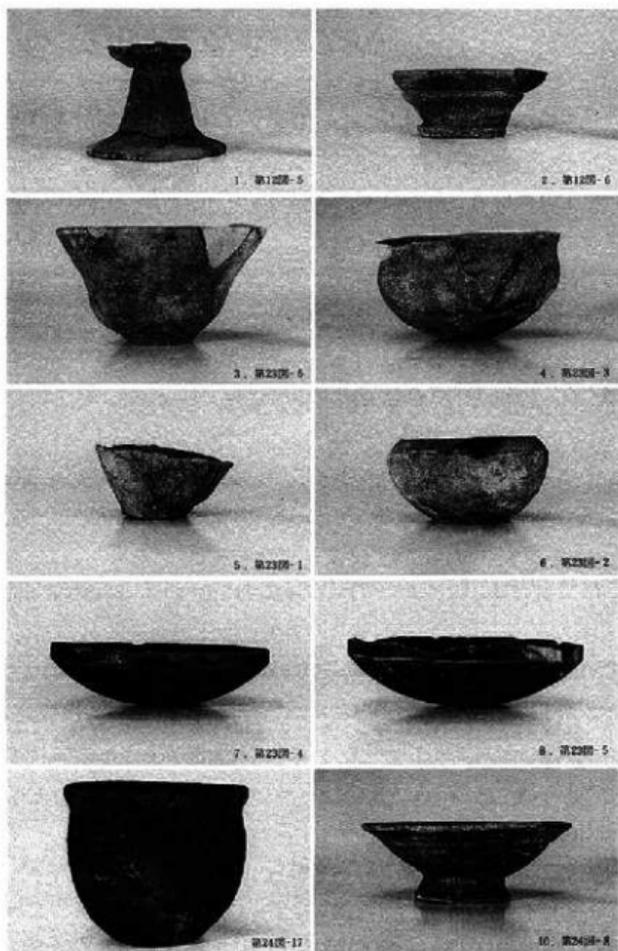
D区S D 302遺物出土状況①
南陸部末側斜面



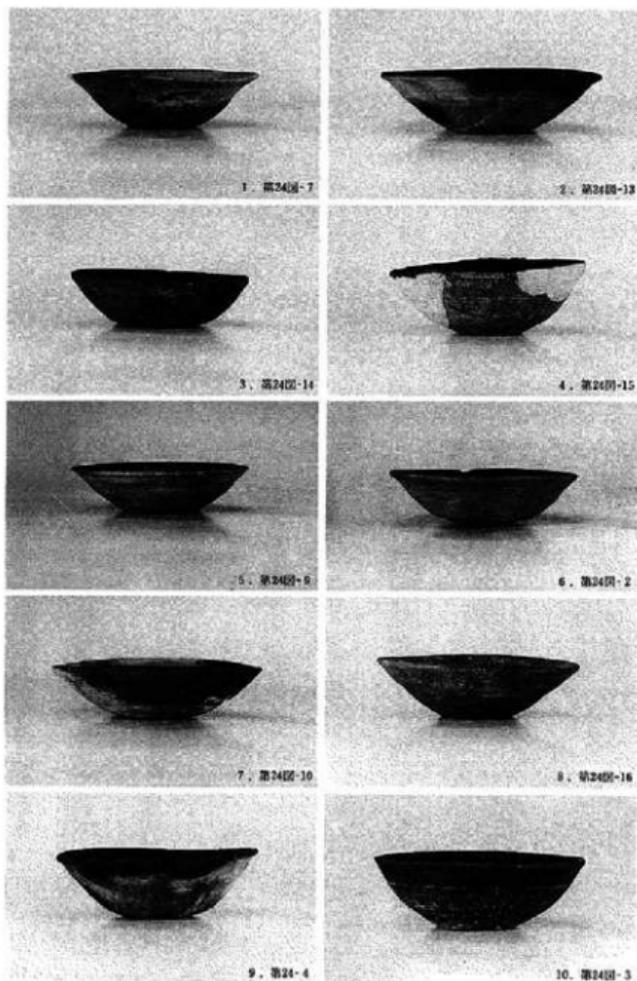
D区S D 302遺物出土状況②



图版13



写真図版14



圖版15

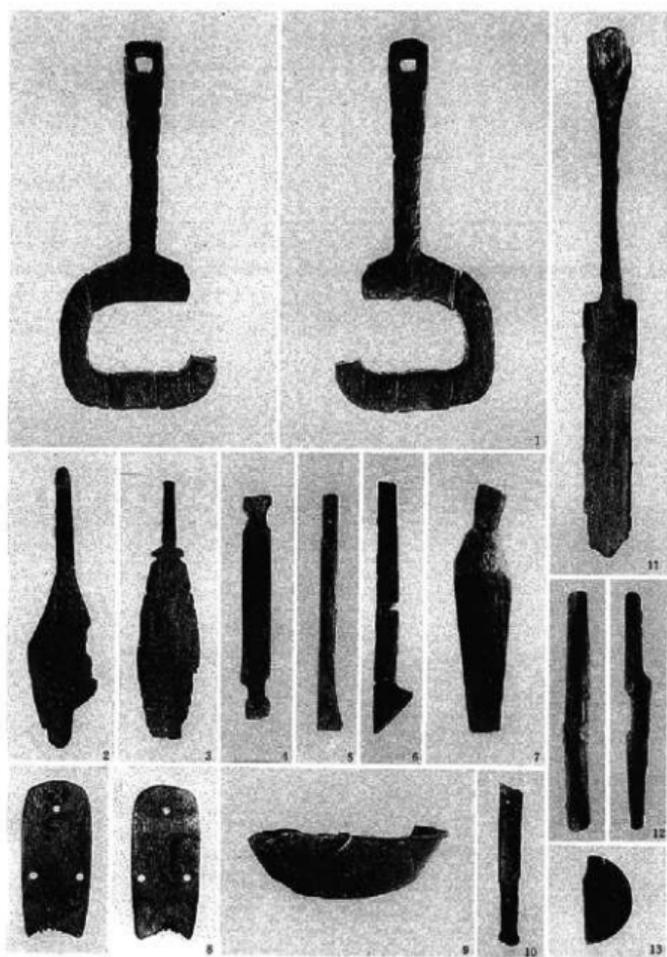
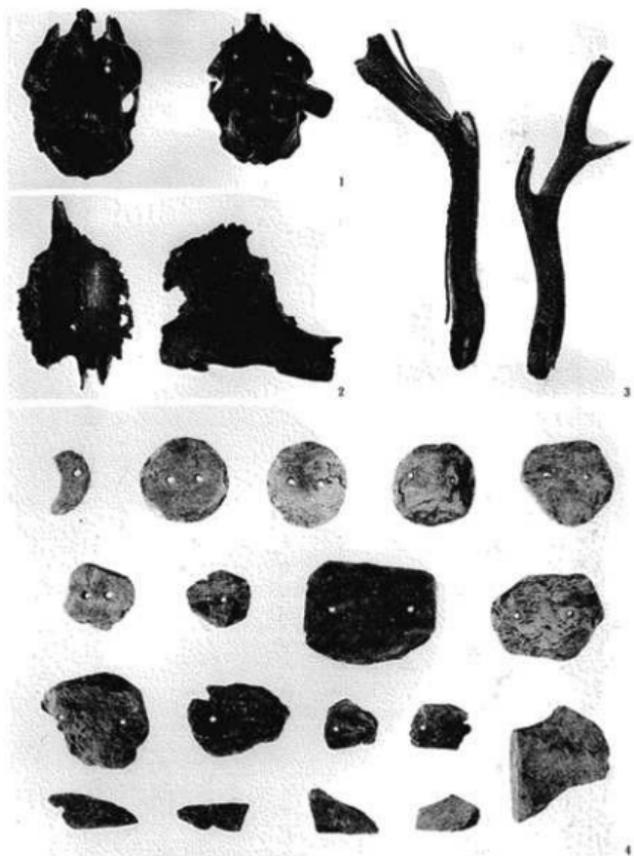


FIGURE 16



00017